

神田外語大学附属図書館所蔵

洋学文庫にみる日本文化

松田 清

はじめに

二〇一六年四月より本学洋学文庫の書誌的調査を開始した。戦後、京都の古書業界の重鎮であった古書肆春和堂の主人、若林正治氏が昭和十年代から四十年代まで、半世紀近くかけて収集したコレクションである。全体を見終わってはいないが、一点一点、手に取るたびに、収集者の幅広い教養と鑑識眼の高さがひしひしと伝わってくる。個人収集の洋学文庫としては質量ともに希有なものと思う。

日本人は十八世紀半ばからおおよそ百年間はオランダ語を、次の五十年間は明治の末までに、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語を次々に外国語として学習し、その間にアイヌ語にも触れた。本学洋学文庫はこの百五十年間の外国語学

習、外国語教育にかかわる一大資料コレクションであるが、同時に、異文化交流史から日本文化を考察する上でも、貴重な一次資料である。

二〇一六年十一月十六日に開催された日本研究所主催の特別講演会では、こうした観点に立ち、洋学文庫から異文化交流史にかかわる特徴的な資料を抽出し、(一)イロハとABC、(二)和歌と俳句、(三)香道と蘭学、のサブテーマからなる講演「洋学文庫にみる日本文化」を行った。本稿はこの講演内容をもとに執筆し、さらに補足敷衍したものである。

1 「いろは」とABC

『大日本永代節用無尽蔵』

江戸時代において、児童の手習い、すなわち文字学習は

「いろは」四十七文字の学習から始まった。漢字学習は楷書からではなく、生活に必要な不可欠な草書体から始まった。そのことを端的に示めすが、庶民にまで広く普及した字引、いわゆる節用集である。架蔵の『大日本永代節用無尽蔵』（文久四甲子年「一八六四」春改正増補四刻、京都書林須原屋茂兵衛、京都書林風月庄左衛門他）を例に取ろう。よく使用された傷み本で、初版は寛延三年（一七五〇）、河邊桑楊子旧編である。

全体の構成をみると、本文は「いろは」引きの字引であるが、その前後および本文各丁の上欄は改版ごとに増補された生活百科事典となっている。本文の構成は単語の漢字表記を読み最初の文字に従って「いろは」四十七文字の順に四十七分類し、「いろは」の各見出し字のもとに、単語を乾坤、時候、神仏、官位、名字、人倫、支体、食服、器財、気形（鳥獸魚蟲など生類）、草木、数量、言語の十三部門別に列挙する。分類語彙集を兼ねているのである。本文の使用者はまず、単語の読み仮名に従って、本文各行に墨筆大書された漢字表記の草書体を検索学習し、次に草書体の左脇に小さく添えられた対応する楷書体と各漢字の音訓を知る構造となっている（図1）。この構造は庶民にとっては日用の草書体の習得が必要不可欠であり、楷書体は副次的な教養であったことを示している。



図1 大日本永代節用無尽蔵（架蔵）



図2 大日本永代節用無尽蔵（架蔵）

「いろは」四十七文字の起源は、伝説的には、弘法大師空海が諸行無常の教えを広めるために作ったという「いろは歌」（色は匂へど散りぬるを我が世誰そ常ならむ有為の奥山今日越えて浅き夢みじ酔ひもせず）に求められるが、この節用集では「いろは歌」に触れることなく、百科項目のなかで、挿絵入りで別の伝説によって説明している（図2）。曰く、「往昔弘法大師、大伽藍造営し給ふに、いろはにほへとと長斧を作り、番匠におしへしめ、材木の番付となさしめ給ひしより、童蒙の手習初となれり」と。仏教の説教臭がほと

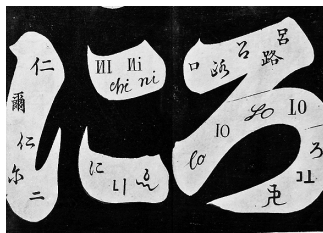


図3 童蒙必見和漢洋以呂波帖
[16182]

んど消えて記号化した「いろは」は寺子屋における幼児の手習いを通して、庶民の文字文化のいわば血肉と化し、「あいいうえお」とABCに象徴される近代教育の普及のなかにあつても、長く命脈を保つことになる。

「童蒙必見和漢洋以呂波帖」

明治初期の文明開化期におけるアルファベット教本は、従来の手習いの「いろは」にならったものが圧倒的に多い。例えば、明治六年（一八七三）刊行の折本『童蒙必見和漢洋呂波帖』（鉄線甫関、東園隆書、宝山堂梓）では、白抜きに大書された「いろは」四十七文字の各文字の中に、対応する漢字の楷書と草書（「以」「伊」「呂」「路」など）、片仮名と平仮名（「イ」「い」「ロ」「ろ」など）、アルファベット大文字と小文字の立体と筆記体（「I」「i」「LO」「lo」など）、ハンゲル（「イ」「ロ」など）が配置されている（図3）。

「阿蘭陀文字」

「いろは」と外国語学習
の関係を蘭学時代に遡って



图4 阿蘭陀文字 [32815]

考察しよう。青木昆陽『阿蘭陀文字略考』の編集、『解体新書』の刊行（安永三年、一七七四）に始まる蘭学勃興期には、備忘録的に日常的な類語を集めたオランダ語単語帳が多く作られた。これらは収録語彙数が少なく、本格的なオランダ語学習のためよりは、むしろ好事家的な異国趣味を満足させるものが多かった。天明期（一七八〇年代）に作られたと推定される『阿蘭陀文字』と題する横小本がその例である。格言、十二ヶ月の月名、四季名、七曜名、七金名、十二宮名、七惑星名、四方名、主要国名などを収める。しかし、文

「蘭語訳撰」

和蘭 Fransch 拂郎察 Engeland
暗父利亜 Italian 意大利亜」の
ように、国名と国民・言語の名詞・
形容詞とが混同されている。この場
合、Fransch、Italian は国名とし
てはそれぞれ Frankrijk、Italië とな
ればならない (図 4)。

文化文政期（十九世紀最初の四半世紀）は蘭学発展期にあたる。この時期になると蘭学者たちはオランダ

語文法の基礎知識を習得し、多少とも正確にオランダ語の読み書きが出来るようになる。その需要に応え、蘭癖大名の一人、中津藩主奥平昌高（一七八一―一八五五）がオランダ語を書くための日蘭語彙集『蘭語訳撰』（一八二二）二巻を編集刊行した。

幕府天文台の翻訳助手に採用された元オランダ通詞馬場佐十郎の稿本を昌高の家臣神谷弘孝（ひろよし）が刊行したもので、和洋折衷装丁である。すなわち、左袋綴じの和本であるが、綴じは糸ではなく鉄止めであり、蘭書にならって蘭文標題紙が付けられ、WOORDENBOEK / Minamoto Masataka / Kamijia Fiojosi. の三行にはルブリケーションが施されている。本文は節用集にならって、見出し語七千余語を「伊呂波」四十七文字にしたがって区分し、各区分に収録された単語を天文、地理、時令、数量、宮室、人品、家倫、身体、神仏、器用、衣服、飲食、文書、錢穀、采色、人事、動物、植物、の部門に分類し、各見出し語には読み仮名をつけ、訳語のオランダ語を対置している。例えば、「(うんき) 温氣 Warmte」[(うん) 雨天 Regen weer] [(うみ) 海 Zee] [(うしほ) 潮水 Zee water] の如くである(図5)。

洋学文庫は『蘭語訳撰』の第二巻を二本所蔵している。一本は「大江氏」と「大江範聖」の印記をもち、奥平昌高の侍医大江春塘の子孫の旧蔵本と推定される(図6)。もう一本

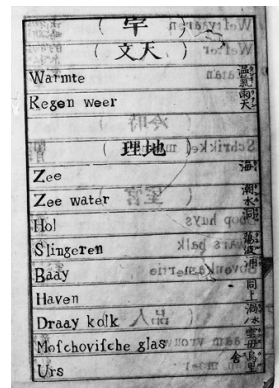


図5 和蘭訳撰 [32828]



図6 和蘭訳撰 [32828]

指す²⁾。また、収集した若林正治が「春鉢堂」の印記を残している(図7)。この詳證館本の第一巻は泣き別れの状態で、早稲田大学洋学文庫に収蔵されている。

既述のように、節用集は「いろは」引き辞(ことば)典と部門別の事(こと) 典を兼ねていた。これに対し、オランダ

は元の装丁のまま、表紙の鉄止め、蘭文題簽、表紙の小口に用いられた竹芯が残されている。

印記の「詳證館」は内田弥太郎(五観、一八〇五―一八八二、高野長英門人)の数学塾であり、詳證は数学を意味する漢語である。「瑪得瑪弟加学士」は内田弥太郎を

館長ヘンドリック・ドウィフがフランソワ・ハルマ『蘭仏辞典』（一七二九）をもとに、オランダ通詞の協力を得てほぼ完成させた蘭和辞典、いわゆる「ゾーフハルマ」もアルファベット順の一般語辞典である。「ゾーフハルマ」は文政年間から蘭学塾に写本の形で広まり、それまでの「江戸ハルマ」（寛政八年一七九六成）に頼っていた蘭学生たちのオランダ語力を飛躍的に高めた。蘭学生たちは「ゾーフハルマ」の筆写をとおして、アルファベット順配列に親しんだ。

また、文政年間から先進的な蘭学塾では、オランダ語医書からの翻訳を教授するのではなく、オランダ語の文法書、医学書、理化学書の原典を直接講読する、いわゆる原典主義が採用されるようになる。その過程でオランダ語やラテン語の専門用語を集めたアルファベット順の語彙集が生まれた。文化文政の蘭学発展期に、限られた蘭学塾の範囲ではあった

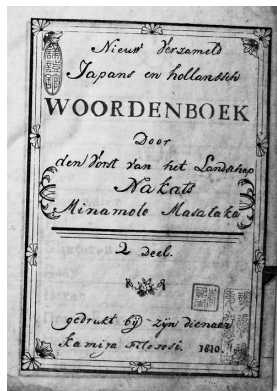


図7 和蘭訳撰 [16103]

通詞や蘭学者たちが利用したオランダ語版百科事典はアルファベット順であり、文化十四年（一八一七）までにオランダ商

が、日本において「いろは」順の文字文化からアルファベット順の西洋文字文化への転換が始まったのである。

ボイス『新修学芸百科事典』

蘭学の勃興した天明年間、一七八〇年代から舶載され、一八六〇年代まで、蘭学者たちが重用したアルファベット順配列のオランダ語百科に、ボイス編纂『新修学芸百科事典』（アムステルダム、一七六九〜七八）十巻がある。小項目主義のこの事典はロンドンの出版者オーウエンがデイドロ、ダランベールのフランス百科全書を縮約編集して刊行した英語百科事典を翻訳家エフベルト・ボイスがオランダ語に編訳したもので、毎葉多数の小図からなる銅版図版二八二葉も英語原書の図版を踏襲している。

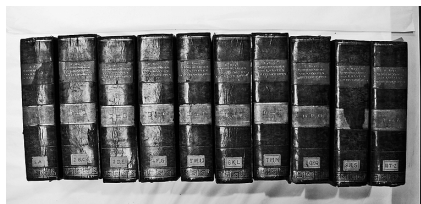


図8 ボイス 新修学芸百科事典 [33453]

洋学文庫所蔵本（図8）は「京都出張兵部省印」「大阪医学会」「石橋栄達蔵書」の印記がある（図9）。石橋栄達は旧制第三高等学校教授で、洋学資料の収集家でもあった。各巻の見返しに貼られたアムステルダムのファン・ク



図9 遊紙の印記 [33453]



図10 見返しの書店ラベル [33453]

レーフ兄弟 (De Gebroeders van Cleef) 書店のラベル (図10) は、この百科事典が文久二年 (一八六二) の幕府遣欧使節将來品であることを示している。

『縮約シヨメール事典』

洋学文庫には江戸時代にボイスの百科辞典ほどしばしば舶載されなかったが、十八世紀末までの欧州の産業発展を踏まえた、コンパクトな八折り版のオランダ語百科辞典『縮約シヨメール事典』または都会人と田園人のための家政学提要 (アムステルダム、一八〇〇―一八〇四) 四巻がある (図11)。アルファベット順配列、大項目主義の農業・博物学事典で、銅版手彩色図版二十二枚を含む。オランダのフリースラント地方の中心都市レーワルデンで活躍した啓蒙的な編

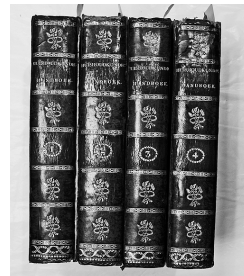


図11 縮約シヨメール事典 [32849]

集者デ・シャルモットがデイドロ、グランベールの『フランス百科全書』をもとに、シヨメール『家政事典』蘭訳 (一七四三) 二巻本を大幅に増補改正して出版した『シヨメール日用百科事典』 (一七七八、正編七巻) とその続編九巻 (一七八七―一七九三) を農業・博物関係項目に絞って縮約し、さらに時代に即応した内容に改編したものである。

江戸時代舶載の四巻揃いは大変な稀覯本であり、他には京都の本草漢学塾、山本読書室に伝わったものを確認しているにすぎない。この山本読書室本は山本読書室の門人でありパトロンでもあった伊勢商人・物産家の西村広休の旧蔵本である。一方、洋学文庫本は『川北文庫』の蔵書印から、博物学者伊藤圭介の門人で伊勢国朝明郡川北村の本草学者丹波修治



図12 銅版手彩色図版
キノコ [32849]

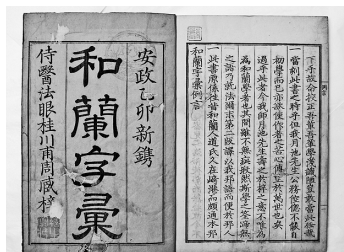


図13 和蘭字彙 扉と例言 [16096]

の旧蔵本と分かる。銅版手彩色図版に挿入された付箋には、丹波の手によるものらしく「上図 食用クワムピグノン」「下図 一般食用菌類」などの墨書が見られる(図12)。「クワムピグノン」はフランス語のキャプション「champignon」の誤読である。

『和蘭字彙』

蘭学の発展した文化文政期から蘭学の取り締まりが厳しくなった天保期を経て、ペリー来航によって惹起された全国的な蘭学ブームに至るまで、蘭和辞典「ゾーフハルマ」は写本で流布したが、幕府官医桂川甫周国興(くにおき)は高まる需要に応じて、安政三年(一八五五)に幕府の

許可を得て「ゾーフハルマ」を『和蘭(おらんだ)字彙』の書名のもとに刊行した(図13)。

「字彙」の語は中国の漢字字典『字彙』(一一一五)に倣って付けられており、見出し語のアルファベット順配列を表していない。底本は商館長ドゥーアの離日(一八一

七)後、幕命によってオランダ通詞たちが増補改訂し、天保五年(一八三四)に完成した「阿蘭陀辞書和解」であった。この場合「阿蘭陀辞書」はハルマ『蘭仏辞典』を指しており、「辞書」はオランダ語 woordenboek の訳語であったが、その後、初の本格的な英和辞典であり、英学時代の始まりを告げる『英和对訳袖珍辞書』(洋書調所、一八六二)の書名のなかで、dictionary の訳語として引き継がれていく。

坪井信道門人の単語帳

オランダ語文法の学習を基礎とするオランダ語医書の講読を、初めて本格的に取り入れた蘭学塾は蘭方医坪井信道が文政十二年(一八二九)に江戸深川上木場三好町に開いた安懐堂であった。三年後には深川冬木町に蘭学塾日習堂を開く。信道の門人たちが編集したアルファベット順配列の医学用語集は次々に医学生間で筆写され、数多くの写本が伝わっている⁽³⁾。

洋学文庫は中でも最初期の状態を伝える貴重な写本を所蔵する。「葉名アベセ引 コンストウオルド 合」との題簽を持つ伊藤圭介旧蔵本である。「尾張伊藤氏記」「尾張伊藤圭介之記」の印記と「Tookeiske」の墨書がある。前半の「葉名アベセ引」(二五丁)は次頁の図14左に翻字した蘭文標題(図14)を持つ。

ろから、蘭文の年数は当初「tenpo jaar 1」（天保元年）と書き入れ、後に「tenpo jaar 5」（天保五年）と訂正したことが分かる。すなわち、最初の坪井塾安懷堂で天保元年に編集され、のち天保五年までに増補されたものと思われる。宇田川

Latijnsche, hollandsche
en
Chinesche, Japansche
namen
der
geneesmiddelen
verzameld
door
Leerlingen in tuboi,
en herziend door
W. d. G. Sinzai enz.

Te edo,
tenpo jaar 5 <1>

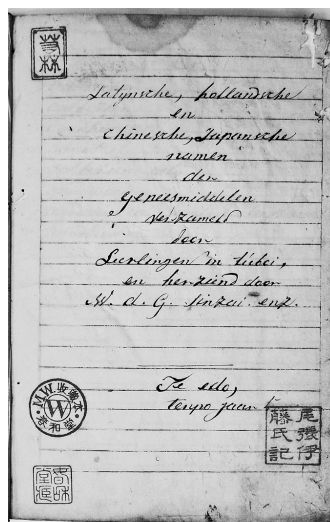


図 14 薬名アベセリ 標題紙
[33231]

これを訳せば、
「羅蘭・漢和・葉
名集 坪井塾生編
宇田川榛斎等校閲
江戸 天保五（元）
年」となる。見返
しに「千八百三十
年 天保元年也」
の墨書があるところ

Verzameling / van de / Kunstwoorden,
/ Betrekkelijk de genees- / middelen, /
door M.O. kenzoo / en daarna verbeterd
en zeer / vermeerderd, zelfs alphabe- /
tisch gerangschikt / door O.G. Sanpij. /
te edo, tenpoo 5.

緒方洪庵である。「コンストウォルド」の原語はオランダ語 *konstwoord* または *kunstwoord*（術語）である。中見出し「GA」から

榛斎（玄真）は坪井信道の師であり、後援者であった。見出し語は主として次の蘭方薬物書三種（いずれも宇田川玄真訳・宇田川榕庵校）からオランダ語・ラテン語の薬名二三六八語を選んでアルファベット順に配列し、訳語を採用した薬物書は次のごとく（薬）（名）（補）の略号で示される。

（薬）『和蘭薬鏡』初編三卷（一八二〇）
（名）『遠西医方名物考』三十六卷（一八二二）二五
（補）『遠西医方名物考補遺』九卷（一八三四）
後半の「コンストウォルド」（五十八丁）は上掲の蘭文標題を持つ。書名らしく訳せば、「M・O・ケンゾー編 O・G・サンペイ改訂大増補 アルファベット順配列 医薬関連術語集 江戸 天保五年」となる。

「M・O・ケンゾー」（三尾謙造）は備前岡山出身の坪井信道門人であるが、履歴など詳細は分からない。

「O・G・サンペイ」は天保二年（一八三一）に坪井信道に入門した

例を示せば、

gargarisma 嗽剂

gallina[isic] 鶏

gallic[isic] フランス

galactophorum 乳汁ヲ湧出ス

とあるように、本文の見出し語のラテン語は往々にして文法的に不十分であるが、当時としては致し方ないことだろう。gallinae et gallinae、gallic は Gallica の誤記である。

坪井信道塾はいわゆる宇田川三代（宇田川玄随、玄真、榕菴）の流れを汲み、江戸の蘭学塾のなかでも、最高水準の原典主義教育と臨床医学教育を実践したことで知られる。宇田川玄随（一七五五～九七）、玄真（一七六九～一八三四）は桂川甫周国瑞および大槻玄沢の門人であり、榕菴（一七九八～一八四六）は馬場佐十郎から当時最高のオランダ語文法知識を学んだ。

坪井信道は文政五年（一八二二）に宇田川塾で「ゾーフホルマ」を三部筆写して学費を得たことで知られる。坪井信道塾からは大坂で適塾を開いた緒方洪庵（一八一〇～六三）のほか、幕府番書調所教官となった川本幸民（一八一〇～七一）、京都で蘭学塾時習堂を開いた広瀬元恭（一八二一～七〇）、佐久間象山にオランダ語を教授した黒川良安（一八一七～九〇）など優れた蘭学者が輩出した。

蘭学者の洋印

蘭学勃興期に、長崎でいち早く西洋医学を標榜し、医学塾「成秀館」を開いたオランダ通詞吉雄幸左衛門はアルファベットの洋印「JOSIWO」を落款や蔵書印として用いた。この趣味を江戸で最初に取り入れたのは桂川甫周国瑞であろう。「HOZUW」の蔵書印が大槻玄沢旧蔵のヨンストン『動物図譜』に捺されている^⑤。広瀬元恭の洋印は自分の肖像の周りにアルファベットと「JAPAN・FILOCE」と彫り込んだ円印である（図15）。

幕末の銅版彫版師の間ではアルファベットの署名が流行した。玄々堂二代目松田緑山の『銅版新鑄極細画便覧』（松田緑山鉄筆、皇都玄々堂発行、乾坤二冊、折帖）に張り込まれた春燈斎岡田義房（儀七郎）の蒸気機関車図（図16）には、



図15 広瀬元恭蔵書印 [32809]

蘭文署名「Sunttoo cij」（図17）が認められる。これは「しゅんとうさい」のオランダ語式ローマ字表記である。春燈斎は山本読書室に出入りした彫版師で、バクテリアの顕微鏡観察図を彫り込んだ土田英章著『微虫図』（嘉永元年一八四八刊^⑥）や山本亡羊著『嘉永二年己酉名花七十二候』などの微塵



図 17 春燈齋 蘭文署名
[33401]

秋田屋太右衛門が出した初版の再版である。「空別泄(アベセ)」の標目のもとに、アルファベット二十六文字にそれぞれ「Aア」「Bベ」「Cセ」「Dデ」「Eエ」「Fフ」「Gグ」「Hハ」「Iイ」「Kカ」「Lル」「Mム」「Nナ」「Oオ」「Pク」「Qク」「Rラ」「Sサ」「Tテ」

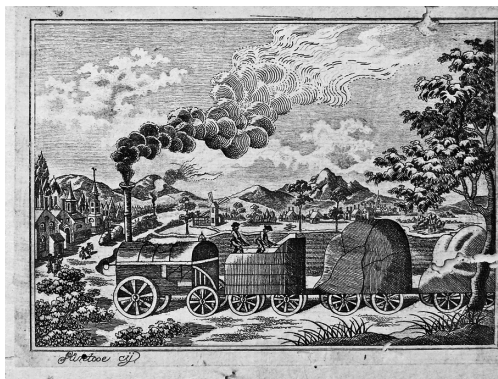


図 16 松田碌山 銅版新鑄極細画便覧 [33401]

銅版画を残している。

アルファベット文字の普及

天保十年(一

八三九)正月、

京都で『和蘭文字早読伝授』

(折本、堺屋仁兵衛版)が発行された。文化十一年(一八一

四)春に大坂の

「Uウ」「Vハ」「Wハ」「Xス」「Yイ」「Zト」の名称を与えている。

江戸時代に手習いに使われた折本の仮名手本は「いろは」四十七文字の片仮名、平仮名、変体仮名、楷書、行書、草書、などの手本を示すものであった。⁽⁸⁾本書はこれに倣って、「いろは」のアルファベット表記を、「メルクレッテル」(merkletter、ローマン書体大文字立体)、「ルームスレッテル」(romensche letter、ローマン書体小文字立体)、「テレックレッテル」(trekletter、筆記書体小文字)、「ドルクレッテル」(drukletter、ゴシック書体小文字)、「イタリヤーンスレッテル」(italiansche letter、イタリック書体小文字)、「イタリヤアンスホウフトレッテル」(italiansche hoofletter、イタリック書体大文字)、「ホウフトレックレッテル」小文字(hoofdtrekletter、筆記書体大文字)の七つの書体で表示している。「いろは」四十七文字に、「ば」「ぽ」「ぼ」など濁音、半濁音の文字を加えてアルファベット表記を対応させているのが特徴的である(図18)。

著者の蘆橘菴田宮仲宣(一八一五没)は戯作者であるが、「和蘭の音ハ直音もあれど多分拗音也。梵書と同じ様なる処多し。梵書よりハ遥かに簡易なるもの也。字原二十六内アイウエオの字母を除て残二十字アイウエオの音母字に接て字を作る也。これをアベセテツレンと云。皇国のいろはと

化に浸透していくが、アルファベットの読み方は必ずしもオランダ語の正規の発音に従わなかった。

「己未ノ崎陽舟中和蘭語遷聞書」（横本、二八丁）は安政六年（一八五九）に長崎の船中で、道誠なる人物が聞き書きし、翌年作成したイロハ引きの日蘭単語帳である。打ち付け書き題名中の「遷」は「選」の当て字であろう。あらかじめイロハ順に配列した日本語に片仮名書きのオランダ語を書き入れ

い	ろ	ろ	は	ば	ば	に	ほ	ば	ほ	へ	べ
I	LO	RO	FA	BA	PA	NI	FO	BO	PO	FE	BE
i	lo	ro	fa	ba	pa	ni	fo	bo	po	fe	be
i	lo	ro	fa	ba	pa	ni	fo	bo	po	fe	be
i	lo	ro	fa	ba	pa	ni	fo	bo	po	fe	be
i	lo	ro	fa	ba	pa	ni	fo	bo	po	fe	be
I	LO	RO	FA	BA	PA	NI	FO	BO	PO	FE	BE
i	lo	ro	fa	ba	pa	ni	fo	bo	po	fe	be

図 18 和蘭文字早読伝授 再版（京都 1839）[32811]

云義におなじ」と述べるように、その解説は悉曇や蘭字の知識を交えた比較文字文化論として興味深い。アルファベットの七つの書体は藤林普山の『訳鍵凡例附録』（跋文化七年二月）に依拠したと思われる。

ペリー来航によつて惹起された蘭学ブームのなかで、アルファベット二十六文字はより広く日本人の文字文



図 19 己未ノ崎陽舟中和蘭語遷聞書 [32950]

ている。例えば、コの項目には、「号令コンマンデル 腰掛スツール 曆アルマナコ 後家ナーホイス 氷砂糖カンデーソイクル」とある。カナ書きにはそれぞれ commanderen、stoel、almanach、nahuis、kandysuiker のオランダ語が対置されるが、commanderen は「号令をかける」という動詞であり、「号令」は commando または commandement でなければならぬ。「後家」に当てられた nahuis は直訳の和製オランダ語であり、正しくは weduwe とすべきである。

情報提供者はオランダ語を学習した日本人船員と思われる。また、この単語帳に示されたアルファベット文字には「アブクトエフグファイキクルムンラブキユルストユフウキスエイセ」という呼称が付けられている（図19）。ABCをオランダ語式に「アーベーサー」ではなく、「アブクト」あるいは「アブクト」と呼んだ独特の習慣が幕末明治初期にあった証拠である。安政年間に長崎

の船に乗り込み、オランダ語を習得していた日本人船員といえ、安政三年（五年の長崎海軍伝習参加者か、その影響下にあった船員と推定される。

足羽県活版局の外国語教科書

明治五年四月、足羽県活版局は八月二日の学制發布に先駆けて、英語入門書『官許ホルストブック』とドイツ語教本『官許独学階梯』（左四眼袋綴じ、小本、五十丁）を金属活字版で翻刻出版した。さらに同年初冬九月には、「足羽県小学校内頒行本」として木活字版の『英綴字』（木活字版、「福井藩頒行本」、美濃判、本文二十一丁）が出版された。これら足羽県出版の外国語教科書が三点揃って収蔵されているのは洋学文庫の他に例がないと思われ、大変貴重である。

『官許ホルストブック』[33927] は左結び綴じ、本文十八丁、縦一四七mm、横一〇〇mm。表紙中央の匡郭内に「官許／明治五年壬申四月翻刻／ホルストブック／足羽県 活版局」と整版で印刷し（図20）、標題紙（p.II）の「FIRST BOOK / OF / LESSONS / FOR / THE USE OF SCHOOLS.」以降、英文序文（p.I2）、本文（pp.3-36）の末尾まで、すべて活版である。本文はアルファベット、母音、子音、イタリック書体、数字、発音と綴りを表示したあと、Lessons I から Lessons XXX まで、簡単な例文から複雑な例文へと段階的

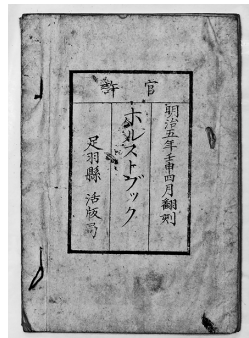


図 20 官許ホルストブック

に発音練習を課している。翻刻の元になった原書は文部省刊行『准刻書目』（壬申四月）が左記のように示す。

フロストブック 出版 足羽県学校 一冊

一八六八年英国ダフリンニテ出版セルヲ翻刻ス

この一八六八年版は、British Library Online Catalogue に記載のある、First Book of Lessons for the use of schools. Commissioners of National Education. Alexander Thom. Dublin, 1855. の後刷本と思われるが、所在は確認できていない。内容的には上カナダ公教育評議会の監修になる左記のトロント版が『官許ホルストブック』とよく一致することを確認できた。

First Book Of Lessons, For The Use Of Schools.
Authorized by the Council of Public Instruction for
Upper Canada. Toronto, Robert McPhail, 1864.

「First Book」の読みを「フロストブック」と表記する例は他に見えないが、「First」を「ホルスト」と表記するのは当時珍しくはなかったようだ。『英語単語図解』（明治五年刊 [16284]）では「Part II」を「パート ホルスト」と読ませている。また、明治初期に「御書物師 三家村佐平」（東京小伝馬町壱丁目 弘文堂主人）が作成した洋学教科書販売目録「口上書」（写本 [33436]）には、

一 ミツチエル ホルストレツシヨン
一 バスケルス ホルスト

の例が見える。それぞれ、左記の原書名の略称である。

Mitchell's First Lessons in Geography for Young Children.

Parker's First Lessons in Natural Philosophy.

『官許独語階梯』は左四眼袋綴じ、五十丁。縦一七九mm、横一二七mm。表紙中央の題簽「官許 独語階梯 全」、見返し扉題「官許／明治五年壬申四月新鐫／独語階梯／足羽県活版局」、一ウ（一オは白紙）のゴシック書体によるハーフ

タイトル「deutsche / lese-und / uebungsbuch」はいずれも整版である。標題紙（二オ、図21）の匡郭内を翻字すれば左記の如くである。そのうち最初の三行「Das / deutsche / lese-uebungsbuch」はゴシック書体による整版、他の行はローマン書体の活版である。

全体に丁付けはなく、二ウは白紙。本文はすべてローマン書体の活版である。『絵入独逸学蒙求』（荒川文平訳、明治五年、東京、鈴木喜右衛門刊、整版、[16499]）のようにゴシック書体を使用していない。本文は三オ（p.5）から始まり、アルファベットの文字と発音（pp.5-7）、Part I（pp.1-26）、Part II（pp.1-30）、Part III（pp.1-30）練習課題（Die Aufgabe für erlernung. pp.14）のようにならびに各部独立したバジネーションを持つ。Part I ～ Part III はそれぞれ段階的に伝統文法を学んだ

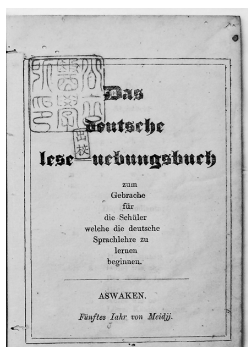


図21 官許独語階梯 [16516]

Das / deutsche / lese-uebungsbuch / zum / Gebrache[sic] / für / die Schüler / welche die deutsche / Sprachlehre zu / lernen / beginnen. / — / ASWAKEN. / Fünftes Jahr von Meidij.

めの例文集となっている。末尾（五十オ）には次のような足羽県学校教官の奥書が左から縦組みで活版印刷されている。ただし、■は誤植を抹消したもので、元の漢字は判読出来ない。

我邦独学ノ開闢日浅フシテ舶載ノ書モ亦乏シ因て英国
〔アーン〕氏彼紀元千八百五十七年対訳セシ日耳曼書中
ヨリ其章句簡要ニシテ用法正純ナル者ヲ撰ンテ之ヲ纂集
シ以テ校内語学生ノ誦習ニ便ナラシムト云爾

明治五壬申四月上流足羽県学校教官■識

これによって、翻刻に利用した原書はドイツの言語教育者
フランツ・アーン (Franz Ahn, 一七九六―一八六五) が一
八五七年に著した初級ドイツ語教科書と推定されるが、その
原タイトル、出版地、発行者等の書誌事項と内容は不明であ
る。アーンはドイツ語のみならず、フランス語、英語、オラ
ンダ語、ポルトガル語など近代諸語の教科書を欧州各地で出
版している。

『英綴字』は左四眼袋綴じ、二十一丁。縦二三〇mm、横一
五二mm。表紙中央の題簽「明治五年初冬刊／英綴字／足羽県
／小学校内頒行本」許 独語階梯 全」は整版（図22）。本
文にパジネーション、丁付け、いづれもなく、全丁に匡郭を



図22 英綴字 表紙 [16200]

施す。一オの左下、綴じ目と匡

郭の間に「福井藩頒行本」と印刷されているところから、本
文は明治四年七月の廃藩置県以前に印刷されたと推定され
る。最初の三丁は整版により、アルファベットのローマン書
体 (The Roman) の大文字（一オ）、小文字（一ウ）、アル
ファベット筆写体 (The Script) の大文字（二オ）、小文字
（二ウ）、ローマ数字 (The Roman notation, 三オ）、アラビ
ア数字 (The Arabic notation, 三ウ）が表示され、第四丁か
ら最終丁（図23）までは欧文木活字による活版である。

この整版による三丁分の典拠は不明であるが、第四丁以降
の欧文木活字の部分は幕府開成所刊行の『英語階梯』（慶応
二年、木活字版 [16262]）からの抜粋であり、そのルーツは
英国の文法学者リンドレー・マレーが著した英語綴り字書、

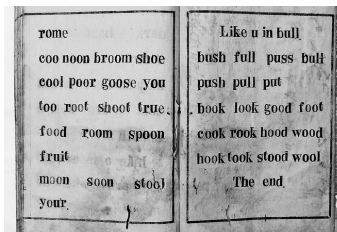


図23 英綴字 本文末尾 [16200]

Lindley Murray. *English Spelling-Book*. Paris, 1839. にあ^る。
『英綴字』の木活字は『英語階梯』の木活字よりも大きく読みやすい。

洋学文庫の『英綴字』は「[This book belong [sic] to H Tanabe]「田辺白龍英学先生」「越前国南條郡坂口村 少林寺弟 苗代益隠」「曹洞学林宗費生 苗代益隠」「明治廿三年八月廿四日」などの書き入れから、田辺白龍なる英語教師から、その生徒苗代益隠に譲られたものと推定される。アルファベット二十六文字に付けられた「エー ビー シイ デイー イー エフ ジー エッチ アイ ゼー ケー エル エム エン オー ピー キュ アル エス ティー ユー ヴー ダブルユー エックス ワイズイ」の読みは生徒の苗代が明治二十三年頃に書き入れたものだろう。明治五年当時はどのような読みが教授されたのか、知りたいところである。

明治五年における『ホルストブック』と『英綴字』の使用状況については、同年十一月、大野小学校の教員が足羽県学校掛に対して、生徒増による不足を補うために、『ホルストブック』五十部と『綴字書』百部の斡旋を求めた事例が報告されている¹⁰⁾。

2 和歌と俳句

洋学文庫には江戸・明治期日本人の外国語学習に関する資料に混じって、日本文化の基調をなす和歌や俳句、漢文にかかわる異文化交流史資料も含まれる。ここでは、その中から、欧州の日本学黎明期にパリで日本語日本文学を教授したフランス人学者レオン・ド・ロニーの『日本語考』（パリ、一八五六）、クナシリ島でアイヌ風俗を詠った旗本羽太正養（はぶと・まさやす）の『蝦夷地歌仙』（二八〇二）、商館長ヘンドリック・ドゥーフの俳句を収録した『四海句雙紙 初編』（一八一六）、ライデン大学の日本学者ホフマンが日本人留学生の津田真一郎と西周の協力をえて出版した『大学和字旁訓』（ライデン、一八六三）を取り上げる。

ロニー『日本語考』

レオン・ド・ロニー（一八三七～一九一四）は来日することなく、シーボルトが石版で翻刻した節用集『和漢音釈書言字考（Thesaurus Linguae Japonicae）』（ライデン、一八三五）をもとにほとんど独学で日本語を身につけた。その日本語研究の最初の成果をまとめ、日本開国後の欧州における日本語需要に応えるべく、当時欧州東洋学の中心地となっていたパ



図 24 ロニー 日本語考 [33140]

りで、日本語書名『日本語考』を冠して出版したのが、『日本語研究序説』Léon de Rosny, *Introduction à l'étude de la langue japonaise*. Paris, Maisonneuve, 1856.であった。ロニーはこのとき弱冠十九歳。その略標題紙（ハーフタイトルページ）と標題紙（タイトルページ）の間には、日本式に匡郭を三分し、石版で「囉尼小儒輯著／日本語考 全一本／巴里城 尼科瓏聚珍房印 墨頌訥仙書肆發客」と印刷した扉が挿入されている（図24）。

扉の「日本語考」の草書体はロニーの手になるものである。う。「囉尼」はロニーが使用した漢字名であり、序文末尾には署名に代えて「勒温囉尼」（レオン・ロニー）の印記を用いている。「小儒」は謙遜を示す。「尼科瓏」（ニコラ）聚珍房」とは東洋諸語の活字を所有していたマリウス・ニコラ（Marius Nicolas）印刷工房のことで、ロニーは序文でニコラ氏に謝辞を述べている。「墨頌訥仙」は東洋学専門書肆メゾヌーヴの音訳である。

この高度な日本語教科書には読解練習（Exercice de

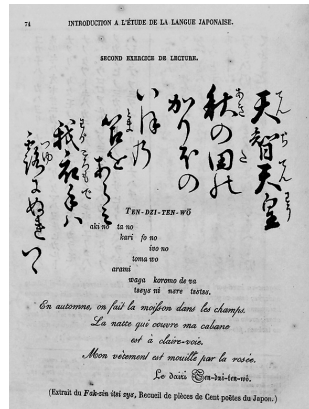


図 25 第二教材 天智天皇和歌

lecture) の教材が二種、掲げられている。第一教材は千字文の読み下しの抜粋（天地玄黄から乃服衣裳まで）を片仮名

書きと平仮名書きで示している。すなわち、仮名書きは「アメツチハ クロク キナリ。」で始まり「スナハチ コロモヲ キル。」で終わる。平仮名書きは「あめつちハくろくなり。」で始まり「すなハちころもをきる」で終わる。片仮名、平仮名ともに活版であり、ローマ字に転写したテキストが添えられている。テキストのフランス語訳はなく、脚注で参考文献として親友のライデン大学日本学教授ホフマンのドイツ語訳を参照させる。

第二教材が天智天皇の和歌「秋の田のかりわのいはの苦をあらミ我衣手ハ露にぬれつ、」である（図25）。百人一首の版本（版種不明）から和歌を石版で転写し、次頁に掲げたようにローマ字テキストにフランス語訳も加えている。この石版による原テキストの提示方式はパリ東洋語学校教授として

SECOND EXERCICE DE LECTURE.

TEN-DZI-TEN-Wô

aki no ta no
kari fo no
ivo no
toma wo
arami
waga koromo de wa
tsô yô ni nôre tsô tsô.

En automne, on fait la moisson dans les champs.

*La natte qui couvre ma cabane
est à claire-voie.*

*Mon vêtement est mouillé par la rosée.
Le dairi Ten-dzi-ten-wô*

には世界地図上、欧州人にとって未踏の海岸線は日本の北方とオーストラリア南東部のみであった。フランス革命の時代に蝦夷地に対する地理学的、博物学的関心、またそこに住む諸民族に対する民族学的関心が欧州の学界において非常に高まったのは当然であった。シーボルトが日本滞在中（一八二三～二九）に北方の地理情報を求め、アイヌ研究資料を収集した背景にはそうした欧州学界の渴望があったのである。

一方、幕府は蝦夷地経営を本格化させるため、寛政十一年

長年行った日本文学講読の集大成『日本詩歌葉』

Anthologie

japonaise. Paris,

Maisonneuve,

1871.に至るまじ

一貫している。

「蝦夷地歌仙」

大航海時代以

来、近代欧州諸国

による海洋探検の

結果、十八世紀末

（一七九九）に蝦夷地取締御用掛を新設し、旗本の羽太正養（はぶと・まさやす）、松平忠明、石川忠房らを任命した。伊能忠敬が東蝦夷地沿岸測量を行うのは翌寛政十二年である。

洋学文庫には、享和元年（一八〇一）、羽太が東蝦夷地を

視察中、クナシリ島の北端アトイヤで作ったという「蝦夷地歌仙」の写本（四丁、整理番号 [165491]）がある。羽太は享和二年には初代蝦夷奉行（のち箱館奉行）に任命されている。この写本は左記の奥書にあるように、文化十四年（一八一七）年四月二日に知足軒なる人物が港安という和尚の入手した写本を筆写したものである。

享和改元辛酉の年、御目付役羽太庄左衛門（後箱館奉行ト成、安芸守二任ス）東蝦夷地巡見之節、クナシリ島の内アトイヤといふ所に風待滞留の時、歌仙の俳句を作り起、一時消閑之戯れといえ共、其風俗をいへり、今写して置候、時 文化十西四月二日從港安和尚得之即時写之 知足軒

本文の各丁上欄には、羽太が歌仙に詠み込んだアイヌの風俗に関する頭注が多く○印とともに付けられている（図26）。当初、この頭注が誰の手になるものか分からなかったが、国会図書館古典籍資料室所蔵の写本（20015）、羽太正養著・

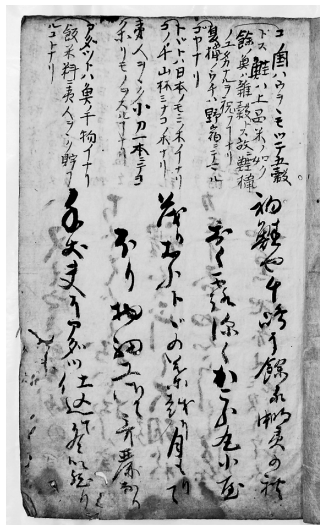


図 26 蝦夷地歌仙 [16549]

新楽閑叟編注「蝦夷地俳諧歌仙」から新楽閑叟の注であると判明した。国会図書館本は蝦夷地取調御用の近藤正斎が寛政十一年六月二十一日付けでクナシリ島のアトイヤから『東游雑記』の著者古川古松軒に書き送った蝦夷紀行「正斎与古松書」の写本と合綴されている。

合綴された二写本には佐藤信淵の蔵書印「椿園蔵書」が捺されており、巻末には佐藤信淵研究で名高い織田完之が明治十九年四月四日付けで、両写本とも佐藤信淵幼年の真筆であることを詠じた七絶を書き加えている。織田はこの写本を友人松岡万から示されという。

洋学文庫の「蝦夷地歌仙」は、この佐藤信淵自筆の国会図書館本「蝦夷地俳諧歌仙」との照合により、次の二点において、新楽が編集した祖本の原初の姿を伝える貴重な写本であ

ることが分かった。

第一に、洋学文庫本は後書きに「クナシリ島の内アトイヤといふ所に風待滞留の時」とあるように、歌仙が巻かれた状況を詳しく伝えているのに対し、国会図書館本は左記のように前書きで「蝦夷地巡見の時」と記すのみである。

蝦夷地俳諧歌仙

新楽閑叟註

享和改元辛酉の年、御目付羽太庄左衛門（名正養、後箱館奉行となり、安芸守に任ず）蝦夷地巡見の時、六々の俳句を作る、一時消閑の戯作といへども、風俗を見るに足れり

第二に国会図書館本は編者の後書きに、左記のように「いさ、かの注釈を標に掲ぐ」とあるにもかかわらず、注は標注（頭注）ではなく、本文中に置かれている。しかも、洋学文庫本が長句短句を合わせ書きしたものに、主に長句を対象として短い頭注を施しているのに対し、国会図書館本は長句と短句を分かち書きにして、長句短句それぞれに詳しい注を加えているのである。

右芸州君の歌仙、いまだ蝦夷地に遊ぶざるもの、曉し難からん事を思ひ、いささか注釈を標に掲ぐ、享和癸亥夏

五、東都の新楽閑箱館の官舎に筆を採る

次に、洋学文庫本の冒頭、発句、脇、第三から六句目までを参考のため、頭注とともに紹介しよう。頭注は紙面の都合上、長句短句の合わせ書きの左下に掲げる。

初鮭や千嶋に餘る蝦夷の秋

おく露深くかこふ丸小屋

○コノ国ハウヲ、モツテ五穀トス、鮭ハ上品米ノ如ク餘ノ魚ハ雜穀トス、故ニ鮭獵ノユタカナルヲ祝フコトナリ

茂りおふトゞの葉越に月もりて
ほり物細工さて奇麗なり

○トットハ日本ノモミノ木ノコトナリ、コノチ
(地) 山林ミナコノ木ナリ

手丈夫にアダツ仕込て冬籠
又もやきゆる砂の埋火

○アダツトハ魚ノ干物イナリ、飯米料ニ夷人ヲ、ク貯フルコトナリ、コノ国ハ夏秋焚火ナリ、爐エ砂ヲ入テ常ニ入替、灰ノタマヲヌヨウニスル故ニ埋ハモタヌナリ

羽太はロシア使節レザノフの部下フヴォストフが文化三年(一八〇六)九月、カラフトを、ついで翌年四月に、エトロフを襲撃した露寇事件の責任を問われ、松前奉行を罷免になる。文化五年には長崎港にイギリス船フエートン号が侵入した。オランダ商館長ドゥーフは露寇事件とフエートン号事件への対策を迫られた幕府に協力しつつ、オランダの權益を守るために不利な国際情報を秘匿した。しかし、文化八年(一八一)にクナシリで捕縛されたロシア船ディアナ号船長ゴローニンが部下とともに松前で幽閉中に、彼の部下ムールが松前奉行に差し出した陳情書(文化九年四月五日付け)によつて、幕府はナポレオン戦争下の新しい欧州情勢を知ることになった。

文化年間にはオランダ文法知識の普及と蘭和辞典「ゾーフハルマ」の成立によつて、それまでよりも正確な読解が可能になり、蘭学の発展期にあたるが、同時に幕府ロシア、イギリス、フランス三国がオランダにまさる世界的列強であること、幕府がようやく認識し始めた時代でもある。



図 27 横浜見物手引 [33445]

時代は下って、いわゆる安政の開国によって安政六年六月（二八五九年七月）に開港し、長崎に代わる西欧文化受容の窓口になった横浜では、大小さまざまな横浜絵と呼ばれる錦絵や片々たる木版の横浜案内記が大量に生産消費されるようになった。黒船シヨックで巻き起こった蘭学ブームはまだその勢いを保っていたが、そうした案内記のひとつ、「横浜見物手引」には、「イギリス」「オロシア」「フランス」の商人フランス墓、オロシア墓、イギリス墓まで描かれているのに対し、かつて長崎案内記に描かれたようなオランダ人、オランダ墓はもはやみられない。ちなみに、この案内記に捺された印文「漂譚楼」（図27）は『漂流奇談全集』（一九〇〇）や『明治事物起源』（一九〇八）の著者として知られる石井研堂の号であり、書名は石井の命名による。

『四海句雙紙 初編』

オランダ商館長ドゥーフは本国が一七九五年から一八一三年まで事実上フランスの属国になり、ナポレオン戦争の余波でバタビアから交代の新任商館長が来なくなつたため、一七九八年の来日から数えれば、一度バタビアに帰っているものの、一八一七年に離日するまで、都合十九年間日本滞在を余儀なくされた。そのため、交際好きの人柄と才気によって、俳句を作るほどに日本語が上達したのである。

ドゥーフ以前に出島のオランダ人が俳句に接した珍しい例を挙げれば、明和八年（一七七二）七月十五日の盆に、加賀の俳人堀麦水がオランダ商館の宴会に招かれた際、「いざ給へ豚名月と興ずべき」の句を作り、オランダ通詞を介して商館長アルメナウルトに「俗談を雅にひく」という蕉風の俳諧精神を教えようとしたことがあった。麦水が「山中夜話」（一七七三）で自慢げに語っている逸話である。八月十五日の「芋名月」を待ちかね、オランダ料理の宴席で名月をひと月早く楽しもうという興趣を詠じたものだが、商館長には通じなかつたようだ

ドゥーフの俳句は二つ知られている。ひとつは仙台の俳人大屋土由が編集し、仙台国分町の加志和屋正六が上梓した『鵜鮮集』（みさごずししゅう）（一八一八序）に「春風やアマコマ走る帆かけ船 阿蘭陀人」として、ほかの日本人の俳

句と並べて掲載されている。アマコマは、あちらこちら、あちこちを意味する。おそらく古い長崎方言であろう。いまでも沖縄方言に残っている。この句集は『美佐古餅』（みさこずし）という題簽をもち、片仮名漢字交じり文を添えたローマ字書きの跋文がある。その末尾に「hendekdoef bats 1816 april derin dat 和蘭改暦千八百十六年四月十三日 当大日本文化十三年春三月十五日 通詞 子潮訳」とあり、商館長ヘンドリック・ドゥーフが出島で作った跋文であることから、上記の阿蘭陀人はドゥーフと判定できる。

子潮の俳号をもつオランダ通詞が誰であるか不明であるが、この通詞がドゥーフに俳句の手ほどきをしたかもしれない。引用した跋文末尾の不完全な蘭文は、Hendrik Doef bats 1816 april derinde dag（ヘンドリック・ドゥーフ跋、一八一六年四月第十三日）とすべきであろうが、綴りの誤りの原因は分からない。

ドゥーフのもうひとつの句は、文化十三年（一八一六）七月に江戸で出版された『四海句雙紙初編』（二巻一冊）という句集に収録されている。江戸の画家で俳人の玉蕉菴こと白川芝山が諸国の蕉風俳人の句作を編集したもので、洋学文庫の『四海句雙紙初編』は表紙の左上端の題簽がほとんど剥落していたためか、扉題の「四海句雙紙」の題字と「諸州蕉門名家四時句集之巻」の朱印の部分の切り取り、表紙の元題簽

の右脇に貼っている。

この句集の第二巻には、諸国の俳人の四季の句に加えて、漢詩人や外国人の珍しい句を集めている。京都から江戸に移り画塾を開いていた関係で京都の学者文人と交友のあった玉蕉菴は、まず相国寺の禪僧で漢詩人の大典が東行の際に富士山麓をみて作った句（思ひきや愈なりけり不二の山）や儒者・漢詩人の皆川淇園を訪ねた際に淇園が初めて作ったという珍しい句（粒梨子も百日立てば式百文）を載せる。

ドゥーフの句は、文化八年（一八一二）の朝鮮通信使の一人、下判官の「倭やはれ行（く）水に月うた、」、文化三年の琉球使節の一人、鄭嘉訓の「国づとの其ひとつなり不二の山」、長崎の中国人王蘭谷の「日のもと、おもへど寒し旅ごろも」、同じく孟函九の「田うへ女の真似して見せよ菖蒲売」など、外国人の句の最後に位置し、図28のように「阿蘭陀人句」の題のもと、特別に半葉全面に、オランダ式ローマ字書

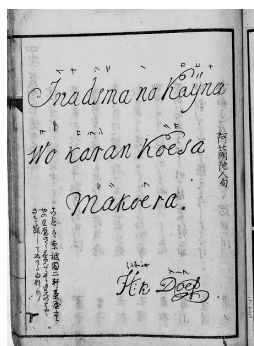


図28 阿蘭陀人句 [33371]

イナツマノカヒナ
Inadma no Kajna
ワカランクサ
wo karan Koesa
マクラー
Makoera.
ハンデルキ ヴーフ
H:k Doef

きの整版で印刷され、カナ文字表記が添えられている。これを翻字すれば前掲のごとくである。

この句を翻字すれば「稲妻の腕を借らん草枕」となる。ドゥーフがオランダ通詞のオランダ語力向上のために、通詞の吉雄権之助と協力して一八一〇年頃までに、ハルマ『蘭仏辞典』（一七二九）をもとに編纂した蘭和辞典「ゾーフハルマ」初稿の自筆草稿は、日本語がすべてローマ字で書かれていた。この句もドゥーフのローマ字書き自筆草稿によるものと考えられる。DoefはDoefと綴るのが正しい。「Hik」はHendrikの省略方式として正しい。

句の左下に「これは京祇園二軒茶屋にて女の豆腐きるを見て其手元のはやきを感じてしける句なり」と句の由来書きがある。大典や皆川淇園の句も、編者の玉蕉菴が直接本人から取材したものであることを踏まえれば、この解説を書き入れた玉蕉菴は、京都時代に実際に二軒茶屋でドゥーフの句作の現場に立ち会ったか、あるいはドゥーフから直接、句を入手をしたと考えられる。

秋里離島『拾遺都名所図会』卷之二（天明七年刊）の二軒茶屋の説明によれば、祇園社の南大鳥居の内、西側に昔から茶屋があり、慶長の頃に東側にも建てて東西両翼のようになり二軒茶屋というようになったという。また「此茶店今ハいにしへに変わりてつねに菽腐（とうふ）を剪（きり）て田楽の

形とし、此一種を出して酒飯を售（うる）。此所の風俗なりとて魚肉を賣（あきな）ふ事を禁ず」「又阿蘭陀人洛東通行の時、東方（ひがしかた）の茶店にやすらひけるも流例になりしとぞいふ」とある。見開きの「祇園二軒茶屋」図（竹原信繁画）には、若い娘の包丁さばきに驚くオランダ人の様子が描かれ、「阿蘭陀か細工にいかぬ我國の祇園豆腐のやらかな音」の和歌が挿入されている。¹⁴

『大学 和字旁訓』

『大学 和字旁訓』はライデン大学日本学講座教授ホフマンが文久二年（一八六二）にオランダに留学した幕府洋書調所教官の津田真一郎（真道）と西周助（周）の協力を得て、日本の『大学 朱熹章句』訓点本（版種不明）をオランダ植民省の漢字仮名活字を用いて翻刻刊行した漢文教科書である。漢文テキスト篇（Part I）とローマ字版読み下し篇（Part II）の二冊からなり、ライデンの東洋学専門書店ブリル（E.J.Brill）社が一八六四年に発売した。洋学文庫所蔵本は日欧交渉史の研究家渡辺修二郎の旧蔵にかかる。

Part Iは和洋折衷の洋装本である。右開きの表紙は和本にならって中央の匡郭内に表題を縦組みに印刷している。表紙の次葉の標題紙（図29）は表紙の表題をそのまま標題とし、標題紙の次の二葉は津田真一郎と西周助の序文からなる。津

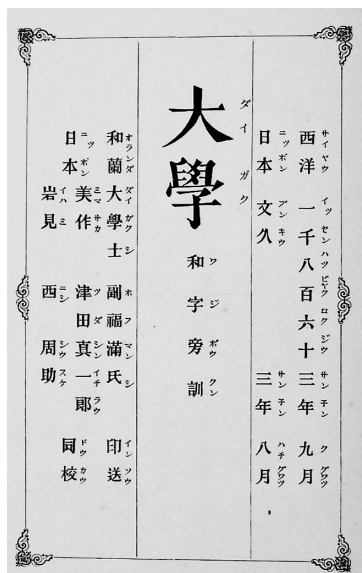


図 29 大学 和字旁訓 標題紙 (扉)
[32781]

THE GRAND STUDY / (TA HIO OR DAIGAKU)
/ — / PART I. / THE CHINESE TEXT WITH
AN INTERLINEARY JAPA- / NESE VERSION.
/ EDITED BY / Dr. J. HOFFMANN. / LEIDEN.
/ ON SALE BY E.J. BRILL. / 1864.

西の序文は左記のとおり、白文を活版印刷にしている。

田の序文は和語による筆書きを石版印刷したもので、大和魂を發揮している。石版はホフマンの要請によるものであろう。左記に翻字する。「高国寺堀」は宿舎のあったライデンの運河ホーフランセ・ケルクフラハト (Hooglandse Kerkgraacht) のカルク (翻訳借用) である。

れいてんの博士よはんほふまんぬしこたひかたかな本の大学をこ、のふりにすり巻にものしておのかめをもひとわたりとこはる、によりてみれはうゑもしのあやまりもなくもとのよりハ中々にあさやかにうるはしかくいふは日本美作御家人津田真一郎行彦時に文久の三年八月十二日れいてんの高国寺堀のやとりにしるす

和蘭大学士副福満氏所刊行之大学
原本係日本刊本。活字彫刻明亮篤
原刻。余亦与校焉毫無紕繆。
日本 文久 三年八月

西周助 勤題

本文は漢数字(一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百)でパジネーションを施し、縦組みの漢文テキストである。左開きの裏表紙は枠内に英文書名を印刷し、次葉裏から見開き左右対照で、蘭英両語による標題紙とホフマンの序文(序文)が続く。英語の標題紙は上掲の通りである。

本書は欧州日本学の歴史と日欧文化交流史の観点から、二つの重要な意義を持つ。第一に、欧州で最初に作られた漢文訓読法を学ぶための教科書であり、日本文化を理解する上で必要不可欠な漢文知識を漢学育ちの留学生、津田と西が欧州人に初めて本

格的に教えようとしたことである。しかもテキストは儒教的人文主義の古典が採用された。第二に、校訂を担当した二人が本書に寄せた序文で賞賛しているように、本書には優れた漢字仮名活字と高度な印刷技術が用いられたことである。オランダ植民省の活字はホフマンの指導のもとにアムステルダム・テットローデ活字鋳造所 (Lettergieterij Amsterdam) が製造した、いわゆるホフマン活字であり、オランダの東洋学を推進したホフマンの意気込みが感じられる。

3 香道と蘭学

『香道秋の光』

香は密教とともに中国から日本へ伝わった。しかし、香道の成立は遅く、ようやく桃山時代に始まり、江戸時代十八世紀前半に普及した。¹⁵⁾享保十八年(一七三三)、大坂の香道家大枝流芳が京、大坂、江戸の三都の書林から出版した香道入門書『香道秋の光』の自序に曰く、本書ではすでに世に行われている志野流、米川流の香道具や組香ではなく、「此道にやんごとなき御家の法を伝へ聞し其かたち寸法までを圖して」香道具の作り方を初心者や遠方の人のために示す。組香も志野流、米川流のものではなく、「中古組十品」には「中

古の人の組みをける名高く面白き組を撰びのせ」、「新組十品」には「近頃人々の組みをけるを集めて余が組る所の組香を添」えたという(京都大学文学部図書館所蔵本による)。こうした新機軸の入門書の出版を通して、当時の香道流行ぶりがうかがわれる。大枝流芳は需要に応じて続々と香道書を著した。

平賀源内の火浣布発見

香道と蘭学を結びつけたのは物産家にして戯作者の平賀源内であった。源内は明和元年(一七六四)博物学者の中川淳庵と秩父山中で「火浣布」を発見し、「火浣布」で香敷を作ることに成功した。火浣布は漢語で、火で浣(あら)うことのできる布を意味し、アスベストを指す。香敷は銀葉ともいい、香道で灰の上に置き香を焚くのに用いる方形の小片で、普通、雲母片で作る。中国では隔火という。

源内は火浣布で作った香敷を青木昆陽に頼んで、この年江戸に來たオランダ商館長ヤン・クランズ一行に見せたり、長崎の中国商人への販売を試みたりして、その経緯を述べた『火浣布略説』(一七六五)を刊行し、火浣布ブームを引き起こした。最初の蘭学通俗書、後藤梨春の『紅毛談(おらんだばなし)』(一七六五)もエレキテルとともに、火浣布を取り上げた。

源内は『火浣布説略』に先だつて宝暦十四年（一七六四）三月に著した「火浣布説」において、「右火浣布日本は申におよばず、唐土、天竺、紅毛にても開闢以来出不申」と自分の意見を誇示し、火浣布の珍しさを強調するための典拠として、『香道秋の光』の書名を挙げた。

香道秋の光に遵生八牋を引て曰く、隔火は銀錢、雲母片、玉片、砂片、俱に可なり。火浣布、錢の大きさの如き者を以て、銀鑲周囲して隔火を作る、猶得難し^⑩。

しかし、源内の引用はいささか不正確である。典拠は『香道秋の光』の付録として刊行された巖信著『香志』であった。その「香器類」の章の「隔火」項目に次のような説明がある（京都大学文学部図書館所蔵本による）。原文は訓点付きの総ルビの漢文であるが、読み下して引用する。ルビは適宜省略した。傍線は引用者。

隔火（右ルビ…カウシキ、左ルビ…ギンヨウ）
銀錢、雲母片、玉片、砂片、俱二可ナリ。火浣布ヲ以テ、錢ノ大サノ如クナル者、銀鑲周囲シテ隔火（カククハ）ニ作ル。猶得難シ。凡ソ隔火ヲ蓋（オホ）フトキハ則チ炭減（キ）ヘ易シ。爐ノ四圍ニ筋（ジヨ）ヲ用ヒ直

チニ数十眼ヲ捌（サク）ス。以テ火氣ヲ通ス。周転方（マサ）ニ妙ナリ。爐中火ヲ断ズ可ラズ。即チ香ヲ焚カズ、其レヲシテ長ク温ナラシメ意趣有リ。且ツ灰燥（カワ）クトキハ燃エ易シ。之ヲ靈灰ト謂フ。其ノ香ノ尽余塊（タキガラ）磁盒（ヤキモノカウバコ）或ヒハ古銅盒（コドウノハコ）ヲ用ヒテ収メ起（ヲ）ク。又火盆（クハボン）中ニ投ス可シ。衣被（イヒ）ヲ薰培セヨ。遵生八牋

巖信は漢籍に明るい学僧と思われるが、伝記不明である。孫引きした源内はこの項目の末尾に典拠として『遵生八牋』の書名があるところから、『遵生八牋』に火浣布製の香敷の記事があると信じたようである。『遵生八牋』は高濂（こうれん）の著した明末の日用百科事典で、書名は養生あるは人生を豊にするための八篇（牋）、という意味である。その巻十五の燕間清賞牋に「焚香七要」の章があり、第五項に確かに「隔火」の説明がみえる。しかし、管見に入った版を見るかぎり、火浣布で隔火を作る記事は全くない。巖信の右の引用文中、傍線部は『遵生八牋』の増補版で重なりが確認できるので、巖信の利用した版については後考に待ちたい。

源内が漢籍から得た火浣布説はこのように間接的で文献学的な根拠を疑われるものであったが、西洋の火浣布説につい

ても、源内は商館長ヤン・クランスに随行してきたオランダ通詞の植林重右衛門や今村源右衛門からの耳学間によつて、火浣布はオランダに産せず、往古トルコに産したが今は産しないことを教えられ、ラテン名やオランダ名、火浣布記事を載せる蘭書の名前を知つたに過ぎなかった。源内の「火浣布説」に曰く、

火浣布之名をラティン語にて、アミヤントス又アスベストスとも申候。ラティン語と申は紅毛国¹⁷之古語にて御座候。当時之紅毛詞にては、ステイン、フラス、又アールド、フラス共申候由、紅毛人共申候。尚亦大通詞源右衛門方にて紅毛之事を詮議仕候処、シカツトカンフル、デルケ子イシエン。ナテユール、コンデキサアカ、ウライト。一名レキシコン、ハン、ウライトと申書に出居申候¹⁸。

この「アミヤントス」は *amianthus*、¹⁹「アスベストス」は *asbestos*、²⁰「ステイン、フラス」は *steen-vlas*（石亜麻の意）、²¹「アールド、フラス」は *aard-vlas*（土亜麻の意）に相当する。また、今村源右衛門が火浣布記事を見出した蘭書は、ヨハネス・ヤークオブ・ウォイト著『医薬宝函』（*Johannes Jacob Woyt, Gazophylacium Medico-Physicum of Schat-*

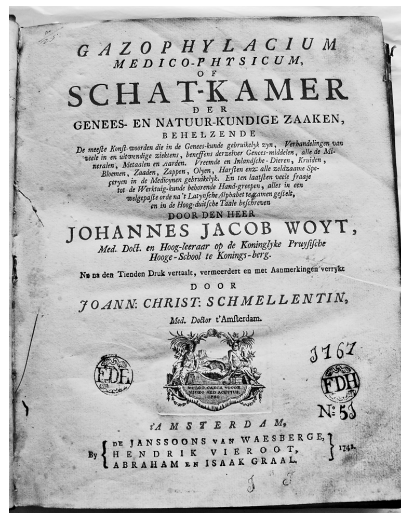


図 30 ウォイト 医薬宝函 標題紙
松浦史料博物館所蔵

Kamer der Genees- en Natuur-Kundige Zaaken, Amsterdam, 1741）であった。この薬物辞典は十八世紀後半からしばしば船載され、当初はオランダ通詞が重宝し、仲間同士で単にレキシコンといえは、この「ウォイト辞書」²²（*lexicon van Woyt*）を指していた。蘭学が勃興した安永永明期には江戸でも蘭学者が利用するようになったのである。現存する古渡りのウォイト辞書で船載の最も早いものは、オランダ商館付き外科医で明和五年四月二日（一七六八年五月十七日）京都で客死したヤン・フランソワ・デ・ハウト（*Jan Francois de Hout*）の旧蔵本である。現在、松浦史料博物館に松浦静山旧蔵本（図 30）として伝わるもので、デ・

ハウトのラテン語書き入れと蔵書印「FDH」(円印)およびオランダ通詞吉雄幸左衛門の蔵書印「Josiwo」があるところから、吉雄がデ・ハウトの生前か死後にこれを入手したことが分かる。「Amianthus, Asbestus, steen of aard-vilas」項目を含め、一五七項目にわたって赤通し(不審紙)が付けられており、早く一七六〇年代から長崎で蘭方医学塾を営んでいた吉雄の医薬研究資料として貴重である。

前野良沢「火浣布」

平賀源内の「火浣布」発見から十年後、前野良沢(一二七三—一八〇三)を指導者とする医師グループが『解体新書』(二七七四)を翻訳し、蘭方医杉田玄白が出版した。これを契機に江戸で蘭学が勃興すると、良沢、桂川甫周、中川淳庵、森島中良、大槻玄沢、宇田川玄随、徳川頼徳(よりやす)ら蘭学グループは、西洋医学だけでなく博物学、地理歴史、天文測量の研究にも取り組んだ。紀州徳川家の九男頼徳はエレキテルをはじめ、幅広い関心の持ち主だった。当時、入手困難な珍品として評判となっていた「火浣布」も彼ら蘭学グループの探求心の対象となった。

なかでもオランダ語読解力が抜群でラテン語やフランス語も研究した良沢は、ウォイトの他にボイス編訳『新修学芸百科事典』と「諸術秘蔵」のアスベスト記事などをもとに、オ

ランダ語の原文から漢訳「火浣布」(一七八三年頃か)を著し、火浣布の名称、産地、種類、形状、薬効を第一図から第五図までの挿図付きで説明している。

この訳稿は宇田川玄随(名は晋(すずむ))が蘭学グループの訳稿を編集した「蘭畝俶載」(早稲田大学洋学文庫および牧野文庫所蔵)に収録されており、訓点付き本文八五〇字余、挿図も含めて三丁余の分量である。末尾に「晋按ずるに此篇に訳する所、皆な諸術秘蔵、医学宝函、及び斐斯(ボイス)等の説に拠る。而して此の図は諸術秘蔵に出づ」(原漢文、傍線は引用者)と玄随が典拠を説明している。斐斯とはボイス編訳『新修学芸百科事典』であり、その第一巻(二七六九)の「アミアントス」(Amianthus)および「アスベストス」(Asbestus)項目が利用された。

玄随が「諸術秘蔵」と呼んだ蘭書は、オランダのフラーネケル市長を務め医学博士でもあった著述家のウィレム・ファン・ラーナウ(一六七〇頃—一七二四)が編集した隔月刊の雑誌「博物・学芸・技芸陳列館雑誌」Willem van Ranouw, *Kabinet der natuurlyke historien, wetenschappen, konsten en handwerken*. Amsterdam, 1719-1724. であつた。合冊装丁された揃い本は小型八つ折り判、索引巻を含めると全九巻となる。古代ギリシア・ローマ時代から十八世紀初めまでの西洋博物書の内容を分かりやすく要約して紹介した啓蒙書であ

る。この雑誌は動物、植物、鉱物のうち特に鉱物が詳しく、アスベスト記事は第八巻の一七二三年一月・二月号の第一八節から第二九節まで (pp. 73-90)、十八ページ分を占める。

洋学文庫の『諸術秘蔵』

良沢が「火浣布」の翻訳に利用した三書のうち、ウオイトの古渡り本は前述の松浦史料博物館本のほかに、杏雨書屋所蔵本（京都江馬家旧蔵本）がある。また、ボイスは本稿で紹介した神田外語大学洋学文庫本の他に、江戸時代船載本がいくつか伝わっている。しかし、ラーナウ『諸術秘蔵』の古渡り本はこれまで伝存が知られてこなかった。

筆者は二〇一五年十月本学洋学文庫を訪れ、初めてラーナウの古渡り本を確認した。若林正治氏コレクションのひとつである。スモール・オクターヴォ版全九巻のうち、第二巻と索引巻の第九巻が欠けた不揃い本であった。装丁は羊皮紙装で、各巻背表紙に巻号を示す数字が墨書されている (図31)。七巻を隙間なく収納できるように特別に仕立てた木箱の蓋には、白い方形の和紙が貼られ、その上に「オランダ博物叢書」と墨書した赤紙の付箋が重ねて貼り付けられていた。各巻とも虫損が激しく、虫損のため綴じ目が崩壊して、しばしば折帖が表紙から遊離し、かなりの錯ページが見られた。これは虫損で剥離した紙葉が後に何らかの事故で表紙からはず



図31 ラーナウ 諸術秘蔵 (コンストカビネット) [33321]

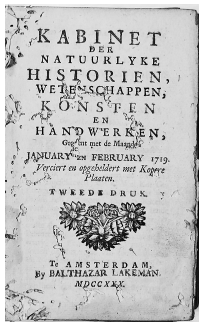


図32 諸術秘蔵 第1巻
標題紙 [33321]

れた際に、オランダ語を解さない人が誤った位置に紙葉をもどしたためと思われる。その後、慎重に細心の注意をはらって調べた結果、左記の書誌の特徴を確認した。

《第一巻》背表紙上部にハーフトイトルによる「NATUUR / EN / KONS T - KABINET」とのインク・ペン書き、下部に算用数字「1」の墨書がある。折り込み図版五枚 (Tabl ~ Tabv) があり、裏表紙見返しに貼付した紙片に「初巻 / 丁数五百五十六 / 画図五丁」の墨書が

る。ハーフタイトルと口絵あり。収録の一七一九年一月・二月号の標題紙(図32)は刊記に Amsterdam, Balhazar Lakeman, MDCCXXX [1730] とある第二版 (Tweede Druk) であるが、一七一九年三月・四月号、五月・六月)の標題紙の刊記は Amsterdam, Hendrik Strik, MDCCXIX [1719] である。

赤通し(不審紙)が四カ所にある。いずれも章題に付けられたもので、各章題は「博物誌のさまざまな種類と博物誌著述家の相違について」(p.182)、「よく知られたすべての動物、鉱物、植物などを記載した総合的博物誌の著者たちについて」[Van de algemeene Natuurlyke Historischryvers, dewelke in haare werken te gelyk van alle de bekende Dieren, Bergstoffen, Gewassen enz. hebben geschreven.] (p.186)、「博物誌の古きについで」最初にフライ人の博物誌について」(Van de Oudheid der Natuurlyke Historie, en eerst van die der Hebreers.) (p.209)、「最初の博物誌著述家神人モーゼの生涯についで」(van het Leven van de eerste Natuurlyke Historischryver, de Man gods Moses. (p.225)である。(第二巻「欠本」)

《第三巻》背表紙に「3」の墨書。口絵あり。ハーフタイトルは欠落。口絵あり。標題紙の刊記は Amsterdam, Hendrik Strik, 1720. 一七二〇年一月～六月の半年分を収録。

折り込み図版は Tab.XI および Tab.XI ~ Tab.XVII の六枚があり、Tab.XII は欠落。

《第四巻》背表紙に「四」と「4」の墨書。ハーフタイトルと口絵はなし。標題紙の刊記は Amsterdam, Hendrik Strik, 1720. 一七二〇年七月～十二月分を収録する。p.162 および p.480 にそれぞれ欠落ページ (pp.163-174, pp.481-496) を漢数字で記した和紙が挿入されている。図版は Tab.XVIII 一枚のみあり、他の図版三枚 (Tab.XIX ~ Tab.XXI) は欠落している。

《第五巻》背表紙に「五」と「5」の墨書。ハーフタイトルなし。口絵と標題紙あり。表紙見返しに「初画壹枚／図画五枚」の貼紙がある。標題紙の刊記は Amsterdam, Hendrik Strik, 1721. 一七二一年一月～六月分を収録。図版は五枚 (Tab.XXII ~ Tab.XXIV, Tab.XXX, Tab.XXXI) あり、五枚 (Tab.XXV ~ Tab.XXIX) 欠落している。挿入紙片 (p.81) に「カンヲ木」の墨書がある。

《第六巻》背表紙に「6」の墨書。ハーフタイトルなし。口絵と標題紙あり。標題紙の刊記は Amsterdam, Z. Moele en J. de Ruiter, 1722. 一七二二年七月～十二月分を収録。図版三枚 (Tab.XXXII ~ Tab.XXXIV) あり。巻末 pp.555-563 および目次 (KORTEN INHOUD) が欠落している。裏表紙見返しに貼付の付箋に「え五枚」とある。

《第七巻》 背表紙に「七」と「7」の墨書。ハーフタイトルなし。口絵と標題紙あり。標題紙の刊記は Amsterdam, Bathazar Lakeman, 1722.

一七二二年一月～十二月分を収録。図版は七枚 (Tab. XXXV, Tab. XXXVI, Tab. XXXVII ~ Tab. XLII) あるが、Tab. XXXV, Tab. XXXVI の二枚は遊離しており、本来第六巻にあるべきものである。図版 Tab. XXXVII が欠落している。

《第八巻》 背表紙に「八」と「8」の墨書。ハーフタイトルと口絵を欠く。標題紙の刊記は Amsterdam, Bathazar Lakeman, 1723. 一七二三年一月～七月分を収録。「題画壹枚／図画四枚」と墨書した挿入紙がある。図版は四枚 (Tab. XLIII ~ Tab. XLVII) ある。(第九巻、欠本)

以上、七巻のうち口絵は第一巻、第三巻、第五巻、第六巻、第七巻に認められ、同一の口絵である。第一巻のハーフタイトルの裏ページにある「口絵の説明」(Verklaring van de Titel-Prent) によって絵解きをする。日輪を頂いた女神は「真理」(光)、羽を付けた女神「歴史」(Historie) の膝に立てられた書物は「自然」(Natuur) を表す。コンパス (passer) と数学書 (wiskonstrigte Methode) をもつ女性性は「実験」(proefkundige Ervarenheid) 左奥の陰に押し込まれたロバ耳の老人は「偏見」(Wanwysheid) を表す (図



図 33 第六巻 口絵 [33321]

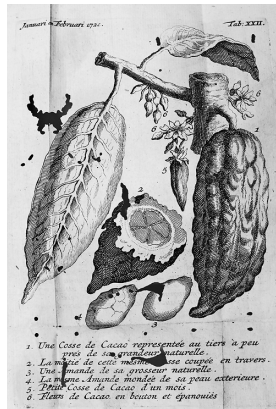


図 34 カカオ図 [33321]



図 35 付箋「カ、オ木」 [33321]



図 36 蓋の付箋



図 37 漢字ラベル

33)。欧州啓蒙期の学問観をよく表現した口絵である。

第五巻のカカオ図(図34)および「カ、オ木」の付箋(図35)は江戸時代のカカオ知識に関する貴重な資料である。天明五年に福知山藩主朽木昌綱が商館長ティチングからワインマン『植物図譜』(一七三六―四八)を入手しており、当時その見事な銅版彩色図版を通してカカオ知識の受容が始まった可能性がある。しかし、その確かな証拠はこれまで得られなかった。

『諸術秘蔵』の伝来と旧蔵者

二〇一六年九月、「カカオ」の付箋とカカオの折り込み図版のある第二巻、およびアスベスト記事とアスベストの折り込み図版のある第八巻が専門業者によって修復された。修復の際に、収納木箱の蓋に貼られた赤色付箋(図36)を剥がしてもらったところ、方形和紙から、「日」という漢字の墨書(図37)が出現した。明らかに、明治期に「オランダ博物叢

書」の付箋が貼られる以前、江戸時代に分類記号として付けられたものである。

このように書箱に漢字を割り振る例を他に求めれば、膳所藩蘭学者黒田麴廬は安政三年、藩校督学の父梁洲の蔵書を引き継ぎ、収納箱に二十八宿の漢字を当て¹⁹⁾。蘭学勃興期の天明年間には、平戸藩主松浦静山が入手した蘭書に千字文の漢字を割り振っている。²⁰⁾「日」という漢字ラベルが前野良沢と同時代に付けられたとすれば、蘭書を所蔵した大名クラスが旧蔵者と推定される。良沢自身は高価な蘭書を購入するにはあまりにも貧乏であった。

良沢の「火浣布」訳稿の末尾で、宇田川玄随がラーナウを『諸術秘蔵』と名付けたのは天明年間と推定される。ラーナウのハーフタイトル「Natur- en Kunst-Kabine」をもとにした名訳であるが、玄随はラーナウの所蔵者に言及していない。蘭学者のラーナウへの言及あるいは利用については八百啓介氏がすでに報告しておられる。²¹⁾八百氏の挙げられた例にそってラーナウの所蔵者を考察しよう。

大槻玄沢は天明三年に例言を書いた『蘭学階梯』の下巻、最後の章「書籍」において、当時の舶載蘭書の主なものを二十一点列挙している。その四番目に「コンスト、カビネト」と見える。これはラーナウをハーフタイトルで呼んだものと判断される。この章の前文には、「往々舶来ノ群籍諸家秘蔵

スル所ニシテ余等既ニ目撃スルモノ数十部ニ及フ近來吾カ輩ノ翻訳ノ業ヲ起スノ際（アヒタ）訳家ヨリ請ヒ受ケテ各々家藏スルモノ亦少カラス今其二三ヲ挙テ左ニ記ス」（傍線、引用者）とある。すなわち、蘭癖の「諸家」（大名や有力者の蔵書や蘭学社中の面々がオランダ通詞から購入した蘭書のリストであって、ラーナウもその他の書物も所蔵者は言及されていない）。

次に、絵師で蘭学知識の通俗的啓蒙家でもあった司馬江漢も「おらんだ俗話」（一七九八成）で、左記のようにラーナウをハーフトイルと呼んでいる。しかし、この場合も所蔵者は不明である。

彼国の人ハ志し異て、人に伝へん事を欲す。蘭書「ホイ
ス」「シヨメール」「コンストカヒ子ット」など云書物ハ
皆大巻の書也。皆奇器を造る書ニして、画図を入て符合
の印を付、手を取て導よふにしたる者也。書面ニ不解所
ありても、画図ニて能曉し安し。小等其書中を閲して西
洋画并ニ銅版画及彫様、押様、其余数品奇械を造る。²²

また、八百氏の紹介された史料、馬場佐十郎訳「泰西七金
訳説付録」（文化十二年、九州大学博物館所蔵、筆者未見）
によって、この付録は「コンスト○カビ子ット」から「緊要

タル数条ヲ」抄訳したものであることが分かる。しかし、高
価なラーナウを馬場佐十郎が所蔵したとは考えられない。

一方、ラーナウの船載記録として最も古いものは、ジャワ
から日本に向かう洋上で一七七八年七月二七日に死亡した商
館長デュールコープの蔵書売り立て目録（オランダ商館文書
No. 11760. Minuut boek A^o 1778 tot 1779）であろう。同年
十月十二日、出島で作成されたこの目録の四番目に、「Raman
[sic] 't konst cabinet 9. deelen」と書名が見える。購入者は
商館長フェイトである²³。この事実から、良沢が使用したラー
ナウはフェイトが一七七九年（安永八）四月あるいは一七八
一年（天明元）の参府時に江戸にもたらしたと推定される。

蘭学勃興期におけるラーナウの日本人旧蔵者としては、ま
ず、幕府医官で蘭学者の桂川甫周が候補に挙げられる。森島
中良は『紅毛雑話』（一七八七）の「火浣布」の章で、兄の
甫周が江戸に来たフェイトと火浣布を見せ合うなど、親しく
交流した模様を活写している。甫周は良沢の門人であり、オ
ランダ語によく通じていた。しかし、ラーナウを収めた木箱
の蓋に付けられた漢字「日」のラベルがオランダ語に通じた
甫周のものとは考えられない。

甫周や良沢と同じ蘭学グループに属し、交流のあった大名
クラス的人物といえ、良沢の門人でパトロンでもあった、
鳳翔公子（ほうしょうこうし）こと紀州徳川家の九男頼徳

(よりやす、一七五九―一八〇二)である。頼徳は天明年間に甫周の指導を受けながら、ボイス(爸乙悉)の万能薬テリアカ(Theriac)項目を漢訳している。²⁴⁾天明四年(一七八四)に頼徳と知己となり交友した松平定信は「紀藩の庶公子松平唯之進朝臣は英雄なり」(『宇下人言』)と高く評価している。洋学文庫本ラーナウの旧蔵者ではないだろうか。

頼徳は寛政五年(一七九三)桑名松平家に藩主として迎えられ、松平下総守忠和(ただとも)と改名した。号を澹寧斎という。早稲田大学図書館所蔵延岡内藤家旧蔵の前野良沢稿集「七曜直日稿・金石品目・火浣布考・和蘭説言略」に「澹寧斎図書記」の蔵書印が捺されている。しかも、ここに収録の「火浣布考 前野良沢述」は宇田川玄随編「蘭畝俶載」収録の漢訳「火浣布」と異なり、漢字片仮名交じりの読み下し文体で書かれており、漢訳以前の翻訳草稿の写しと認められる。良沢と頼徳の師弟関係を物語る資料である。良沢が「火浣布」訳に使用したラーナウの底本は紀州徳川家の九男頼徳の蔵本、すなわち洋学文庫本ではないだろうか。

過去三十五年近くにわたる舶載蘭書調査で、頼徳の旧蔵蘭書と確認できたものは京都大学附属図書館所蔵(TH5-H24)にかかると、「澹寧斎珍藏」との蔵書印を捺したハルマ『蘭仏辞典』第二版(一七二九)一冊のみである。²⁵⁾残念ながら書籍のない裸本である。このハルマは幕末に膳所藩儒黒田梁洲と

その子、『ロビンソン・クルーソー』の本邦初訳『漂流紀事』の訳者として知られる洋学者黒田麴廬の所蔵となり、その子孫から昭和二年に京都帝国大学附属図書館に寄贈された。文政五年(一八二二)京都の蘭方医小森桃塙に入門し蘭学を志した梁洲が入手したと思われる。この羊皮紙装丁の「澹寧斎珍藏」ハルマは洋学文庫のラーナウ同様に虫損が激しい。両者の虫損に関連があるかもしれない。

4 前野良沢「火浣布」翻訳の検討

良沢は「火浣布」翻訳にあたって、ボイス、ウォイト、ラーナウ、三書のアスベスト記事をどのように利用したのか。どの部分をどのように訳したのか、その実態を以下に検討しよう。²⁶⁾

ボイスの利用

最初に、良沢が最も依拠したボイスの「アミアントス」と「アスベスト」の二項目を全訳し、良沢が利用した箇所、アルファベットの大字とともに傍線を付け、それに対応する良沢の漢訳の読み下しをアルファベットの小文字を付けて掲げる。

アミアントス (Amiantus) 博物学用語。繊維質で折り曲げることができ弾力性のある物質。短く粗い繊維からなり、一般にアスベストイ (Asbesti) と呼ばれる化石類の一種である。

アミアンティ (Amianti) にはいくつかの種類がある。(A) 灰緑色で短く粗い繊維組織のものは薬屋で見られるプロイム・アルム (羽毛状明礬) と同じ物である。

アミアントスの特性には実に驚くべきものがある。銅鉄をかけても発火しないし、強水をかけても沸き立たない。火の中に入れてもその組織に少しの損傷もなく、どんな高熱にも耐える。

(B) この鉱物はキプロス (Cyprus) 島に産し、これを灰汁に浸けてインディゴとともに煮ると、貧弱な部分が失われる。そのあとを槌でたたくと柔らかくなり、糸に紡ぎ櫛で梳くことができるようになり、布にすることができ。これを火のなかに入れても燃えない。しかも、このやり方でのみ清浄にできる。

古代人、とくにバラモン (Brachmanen) は死体を焼き、その遺灰をよりよく保存するためにこれを用いたという説がある。しかし、これは考えられない。古代人はこれについて言及していないし、このような使い方を

するほどアミアントがあふれるほどあったわけではないからである。

(C) 医学では頭髮を除去する薬の成分として用いる。解毒薬として良く効き、疥癬を治療するにも良いといわれる。しかし、レムリー (Lemery) 氏は薬効はないという見解である。図版 XVIII の小図三を参照。

(a) 此の石色白 (しろく) して緑を帯び光沢あり。石決明の如し。其の石理、束糸文を成す。

(b) 製法に二有り。第一は止波里 (シヘリ) の法、第二は単殺得 (タンキユット) の法たり。(中略) 第一の法、灰水を用て靛花 (あいばな) を加へてこれを煮る。其の糸条、枯燥せるが如く益々細織の状を成すを候て、軽手に徐徐としてこれを推打すれば則ち鬆解して糸の如し。迺ち櫛を以て梳理して紡績す可からしむ。終に織りて以て布と為すことを致す。火を以てこれを焼き、一箇の潔白石布を成すなり。

(c) 一に云く、此の石効用あること鮮 (すくな) し。凡そ医方中これを用る者希なり。

アスベストス (Asbestus) (博物学) 繊維質で折り

曲げることができ、不可燃性の弾力ある物体で、一本の直行する単繊維からなっている。アスベストにはさまざまな種類がある。アスベストは古代人によく知られており、古代人がこれを糸に紡ぎ、それから布をつくる技術を知っていたことは疑いない。(E)ローマのチアンピ氏 (Signior Ciampi) はこれを用いて数種類の布を織ることに見事に成功した。彼はこの鉱物を水に浸け、手で解きはぐし、羊毛のように柔らかく櫛をかけ、細心の注意をはらって梳き櫛から糸を紡ぎ出した。それを他の糸と一緒に織り込んで布としてから、火に投じると、アスベストの組織が残った。

ロンドンの博物館 (Museum) にはアスベスト製の筆記用紙が所蔵されている。(D) 上述の鉱物類は大タルタリア (Groot Tartaryen) の南部にあるタングート (Tangut) 王国に産する。

- (d) 第二は単殺得 (タンキュット) の法たり。
- (e) 第二法。先づ諸 (これ) を水に浸し、時を経て手を以てこれを摩 (さ) き、従 (つ) いでこれを捫採すれば則ち条分縷折して漸く繊細を成し、旣旣 (さんさん) として獸毛の如し。迺 (なほ) 雑 (まぜ) るに尋常の麻糸を以てし、媒

して紡績を成す。已に糸と為ることを得れば、旋 (やや) 織りて布と為す。諸 (これ) を烈火に投じて、これを焚灼すれば則ち有る所の麻糸尽く灰し、其の存する所の者は独り皓然たる一純石布を余すのみ。再び水を以てこれを洗淨す。

以上の比較対照によつて明らかのように、良沢の最大の誤解は、(E) にみえる「チアンピ氏」、正しくはジオヴァンニ・ジウスティノ・チアンピニ (Giovanni Giustino Ciampini, 1633-1698) によるアスベスト布製法を第二の製法として訳出する際に、(E) にみえるアスベストの産地タングート王国の製法としたことである。また、訳文 (e) は原文をはなれた修辭的な表現が際立つ。

(C) の末尾にみえるレムリーの見解はフランス人薬剤師ニコラ・レムリー (一六四五—一七一五) の『単味薬物事典』 (Nicolas Lémery, *Dictionnaire universel des drogues simples*, Paris, 1733) およびその蘭訳 (Nicolaes Lemery, *Woordenboek of algemeene verhandelung der enkele droegeryen*, Rotterdam, 1743) の Amiantus 項目に見える見解である。この蘭訳は舶載され、桂川甫周国瑞にその抄訳「和蘭葉撰」「独祿傑列印本草訳」があるが、Amiantus 項目

は訳出されていない。⁽²⁷⁾

ウオイトの利用

良沢はボイスについては「斐斯（ボイス）亜密安都私（アミアントス）ノ一条」「斐斯（ボイス）亜私別私都私（アスベストス）ノ一条」と注に断つて典拠を示しているが、ウオイトについては明示していない。典拠に利用されたウオイトの「アミアントス」項目全文の拙訳を左記に掲げ、前節と同じように、良沢の訳文と対照させよう。ただし、「アミアントス」項目末尾にあるアミアントス軟膏の処方省略して訳出しない。

(F) アミアントス (Amiantus)、アスベストス (Asbestos)、ステーン・フラスまたはアールド・フラス (steen of aard-vlas) は繊維質で暗緑色、羽毛状の鉱物であり、羽のように互いに引き裂くことができる。(G) 火で焼き尽くすことはできないが、より白く清浄になる。大抵はインド諸国 (Indien) やトルコ (Turkyen) の産である。(H) 古代ローマ人がこれから燃えない亜麻布 (lyn-waad) を作った、かの石である。彼らは王侯貴族の遺体の中に入れて燃やし、遺灰を保存した。(I) これを糸に紡ぎ、ついで布を作り、火で燃

えることなく、より白く清浄になるに至ったとしても、これは大いなる謎 (arcanum) のままである。(J) 医学では婦人の白滞下 (こしけ) の治療に用いられる。薬局にはアミアント擦剂 (linimentum de Amiantho) が見られるが、これは頭部の疥癬に用いられる。また、これを用いて、火傷をしないように手に塗る別の軟膏を作る。

(f) 亜密安都私 (アミアントス) は即ち石麻なり。和蘭これを亜密安都 (アミヤント) と謂ふ。又た私的員弗刺斯 (ステエンフラス) と云ふ。又た亜尔独弗刺斯 (ア、ルトフラス) と云ふ。私的員 (ステエン) は石なり。弗刺斯 (フラス) は布なり。亜尔独 (ア、ルド) は土なり。(g) 其の垢 (あかづ) き汚るゝに至りては則ち炎火に投卑してこれを焼く。其の潔白、猶を水もてこれを浣濯するがごとし。西書に見えたり。(h) 古昔暹馬 (ローマ) 国に此の布を器具に用ふる者あり。(i) 凡そ此の布、垢 (あかづ) き汚 (よごる) れば火に投じてこれを焼く。其の垢尽く滅し、

粲然として潔白、更に其の故に倍す。猶を水もて洗濯するがごとし。

(j) 亜密安都私(アミアントス) 諸毒を解し、頭垢を去り、白滞下を治す。軟膏に調して以て手に塗るは熾炭を握りて灼爛せず。其の膏方を著(しる)さず。

ボイスの記事の利用のされ方と比べると、良沢は誤訳を恐れず、このウォイトの短い記事をより積極的に利用している。これはウォイトの文章がボイスの文章よりも理解しやすかったからであろう。しかし、(H) (I) の原文は良沢には難しく、原意を取り損ねている。(g) (i) に共通する「猶水を水もて(これを)洗濯するがごとし」という比喩表現は原文の「より白く清浄になる」を強調するための修飾である。良沢は(j)の末尾に「其の膏方を著(しる)さず」と注記している。これは原文のラテン語によるアミアントス軟膏の処方を理解することができなかったためであろう。

ラーナウの利用

良沢はウォイトと同様に、ラーナウについても典拠としたことを伏せている。良沢が用いた挿図五図のうち四図はラーナウ第八巻一七二三年一月・二月号の折り込み銅版図版二枚

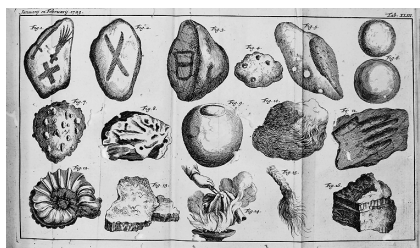


図 38 第八巻 図版第四三図

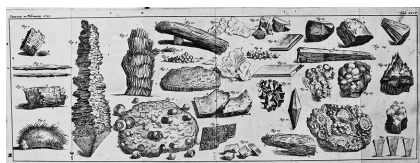


図 39 第八巻 図版第四四図

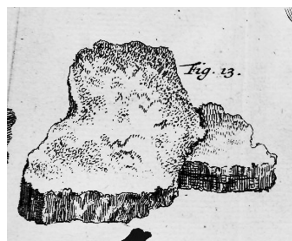
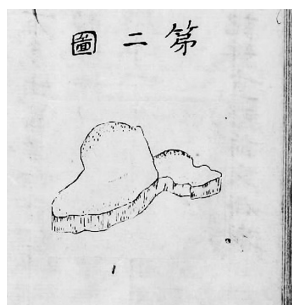
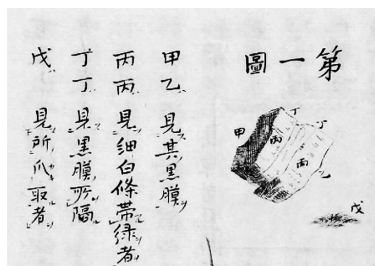
が典拠である。すなわち、図38に示した図版第四三図(Tab. XLIII)の最下段右から四箇のアスベスト小図のうち、右端の小図を除いた三小図(左からFig.13, Fig.14, Fig.15)、および、図39に示した第四四図(Tab. XLIV)の左端最上部(Fig.1)が採用されている。挿図と原図の関係を表示すると左記の如くである。

- | | |
|-----|--------------------|
| 第一図 | Tab. XLIV, Fig.1 |
| 第二図 | Tab. XLIII, Fig.13 |
| 第三図 | (原図未詳) |

第四図 Tab. XLIII, Fig. 15
第五図 Tab. XLIII, Fig. 14

訳文中の挿図参照箇所を抽出して読み下し、挿図（写真は早稲田大学所蔵本による）と原図（本学の洋学文庫本）、ラーナウ本文の図の説明を参照しながら、相互の関連を検討しよう。

（k）形状一に横に截（き）れる薄木片を重ねるが如し。其の間薄き黒皮有りて隔つ。第一図第二図の如し。



第一図 甲乙は其の黒膜を見（あらわ）す。丙丙は細白条緑を帯ぶる者を見す。丁丁は黒膜の隔つる所を見す。戊は爪（か）き取る所の者を見す。

ラーナウ原文の説明によれば、Tab. XLIV, Fig. 1（第一図）は友人で博物収集家のヘンドリック・ファン・ラート（Hendrik van Raet）氏が「真正のアスベスト」（ware en oegrege Amiant）として著者に贈ってきたものである。良沢の説明（k）は原文によらず、図の観察結果を記しており、翻訳ではない。左記に原図（Fig. 1）に関する原文の説明部分全体を訳し、良沢の利用した語句を傍線で示す。良沢の利用は極めて部分的で原文の意味を十分伝えていない。以下、

引用文末尾のVIIIは第八巻を示す。

上皮Aと下皮Bは鱗状の黒色、中間のC部は薄い黒味を帯びた皮からなる仕切りを表している。DD部の小さな線条は蚕の素絹よりも微細であり、剥離するとEに示すように、極上の羊毛のようにふさふさとしている。DD部の色とEの剥離した線条の色は薄緑の滑石と同じかあるいはむしろ、真珠色に染めた光沢のある絹と同じである。(VIII, p.83)

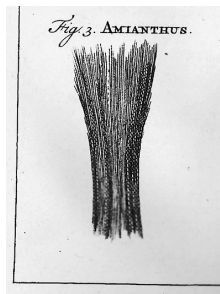
第二図はアスベストの形状が多様であることをしめす図版四三図 (Tab. XLIII) の中の小図 Fig. 13 が選ばれている。しかし、良沢は図版の意図を把握できず、(k) に見るように第一図と第二図を同類視している。原文の説明には小図は「二個のアスベストを示す」とある。

同図版の下端右端の Fig. 16 には、形状の多様性を示す例として、ルンフィウス『アンボイナ奇品室』(G.E. Rumphius, *Amboinsche-Rariteitkamer*, Amsterdam, 1708) から採られたアンボイナ産アスベストが図示されているが、良沢の関心を引かなかったようだ。

(一) 其の質、脆軟。これを分解すれば則ち細糸の

如し。繊微の支絡有りて相ひ錯り以て聯結を為す。第三図の如し。

第三図の典拠は不明である。良沢の利用したボイス第一巻の「アミアントス」項目が参照させる図版十八第三小図 (Plaat XVIII, Fig. 3) が若干類似している。しかし典拠とは判定できない。第三小図を架蔵本によって左に示す。



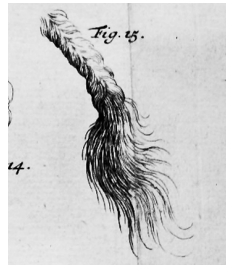
(m) 製して麻糸(まし)の如くにしてこれを貿易する者有り。第四図の如し。

第四図の原図 Fig. 15 の原文説明を次に掲げ、良沢の依拠した語句に傍線を付けよう。

すでに述べたように、古代著作家の報ずるところによれば、アミアントスは伸ばして房に作られた。それは女性

の細い頭髮を編むか巻いて房にした形である。このように加工されて、Fig.15に示した状態でしばしば売られたと云ふ。(VIII, p.80)

第四圖



このように原文では古代ローマで売買された房形のアスベストと説明されているが、良沢はローマ時代のものであるとは読み取れなかった。原文の他所 (VIII, p. 78) で、この形のものとは常夜燈 (altyd brandende Lampen) に使われたとの説明とともに、第四卷 (一七二〇) の銅版図版第十八図の

小図 (上図参照) (Tabula XVII, Fig.8, Fig.9) を参照させている。

(n) 凡そ此の布、垢 (あかつ) き汚 (よごる) れば火に投じて之を焼く。其の垢尽く滅し燦然として潔白

更に其の故に倍す。猶を水もて洗濯するが如し。第五図の如し。

第五圖



この説明文はすでに (i) として掲げ、ウォイトの「アミアントス」項目を典拠とすることを示したが、ここで別号の (n) を付けたのは、左記に掲げる原図の説明文の傍線部も典拠とみなすことができるためである。ただし、良沢は原文の構文をよく理解せず、水中の洗濯が引き合いに出された意味を取り違えている。

古代人はこのような石の繊維あるいは毛を十二分に入手して、よく紡いだ後、これから燃えない布 (onverbrandelyke linden) を作った。こうした布は世

に名高く、好事家たちはそれぞれ自分の博物技芸館 (natuur-en konst-kabinetten) に一大奇品 (een goote rareit) としてこれを愛蔵しているほどである。この布が注目の的となり万人の驚嘆を引き起こしているのは、塵や脂や汚れが付いたり黒ずんだりしたとき、後出の Fig. 14 で示すように、他の布のように水の中ではなく、火の中で洗って清浄にするからである。(VIII, pp.78-79)

十七、十八世紀に欧州で流行した博物奇品室でアスベスト布が珍品としてもはやされたことをよく伝える文章である。良沢たち江戸の蘭学者グループも、欧州の好事家たちと同じ趣味で火浣布に注目していたわけである。しかし、良沢は原文から、古代ローマという時代認識や同時代欧州の博物奇品室ブームの情報を得ることはできなかったようである。

(o) 用ひて以て布に織り、或は以て燭心と為すこと猶を燈心草を用ひるが如し。或は用ひて紙を製し、以て文字を写する亦稀にこれ有り。其の用ひて以て布に織る者は、或は手巾と為し、或は卓子を覆被するの布と為す。

ここに紹介されるアスベストの様々な用途はラーナウのアスベスト記事が典拠となっている。燭心としての用途は原文では、古代ローマの例と近代の例が異なる箇所挙げられている。二つの例を並べて引用しよう。

ローマ人たちはアミアント製の燈心をランプのなかに置いて火を付けるや、油を切らさない限り燃やし続けることができた。他に使われていた燈心 (lennetten) の場合のようにランプの炎で家を焼き尽くされることがなかったからである。(VIII, p.79)

アグリコラが語るには、ザクセンとその他あちこちの地方で、アミアント石を巻いて燈心が作られ、古代人の例にならって燈油ランプに用いられている。また、アミアントを清浄にしてはぐし、糸に紡いで織物を作る。また、ザクセン・ヴィーベルク地方のように、これから卓布 (Servetten) や手拭い (hand-doecken) を作る。ヒエロクレスの証言によれば、ブラマンすなわちインドの哲学者 (Brachmanen of Indische Philosophen) たちは自分たちの服をアミアントで織った石布から作るという。(VIII, p.81)

後者の近代の例はアグリコラ『化石の本性について』第五卷 (Georgius Agricola, *De Natura fossilium lib.v.*) からの

引用であることが脚注に示されている。良沢が「或は以て燭心と為すこと猶を燈心草を用ひるが如し。」と言う場合、「猶を燈心草を用ひるが如し」を原文によらない修辭と考えれば、右の古代ローマの例か、アグリコラの語るザクセンその他の地方の例か、いずれを踏まえているか、判断が難しい。修辭でないとするれば、古代ローマの例を誤解して訳したことになる。「手巾」と「卓子を覆被するの布」はこのアグリコラからの引用が典拠であることは自明である。

アグリコラがストア派哲学者ヒエロクレスの証言として紹介している古代インドのバラモン（聖職者階級）の例を良沢は次のように要約する。

(p) 印度の法教を奉ずる者の用ひて以て法服と為すこと有り。

「法教を奉ずる者」は原文の Philosophen の訳と思われるが、良沢は Philosoph がキリスト教世界で宗教者に対立する概念であることを理解していたかどうか、不明である。ボイスは Brachmanne を een slag van Indiasche Wysgeren (インドの哲学者の一種) と定義しており、良沢がボイスのこの項

目を参照した形跡はない。良沢は、先に考察したボイスの「アミアントス」項目に見える「古代人、とくにバラモン (Brachmanen) は死体を焼き、その遺灰をよりよく保存するためこれを用いたという説」を読んでいたはずであるが、これを採用していない。

筆記用のアスベスト紙は原文ではイエズス会の学僧アタナシウス・キルヒヤーの『地下世界』 (Athanasius Kircher, *Mundus subterraneus*, Amsterdam, 1678) の例が紹介されている。ここでも博物奇品室の収集品としてのアスベスト紙である。

アミアント石で作られた燃えない布は天産物の愛好家のいろいろな奇品室で目撃されてきた。キルヒヤーは、アミアント製の石布はいたるところ、諸侯の陳列館であふれるほど沢山見られる、自分自身すべてアミアント石でできた箱とアミアント製の燃えない筆記用紙 (overbrandelyk schryf-papier) を持っている」と証言している。(VIII, p.88)

良沢訳「火浣布」におけるボイス、ウォイト、ラーナウ、三書の利用実態は以上のごとくであるが、左記に掲げる、火浣布の産地と産地別の優劣に関する記述は、現時点で典拠不

明であり、後考に待ちたい。

此石、欧邏巴の中の諸国に出づ。入尔馬尼亞の中往往に多く有り。又亜細亜の中、印度、単殺得、都児格等に出づ。地中海の東止波里島の産する所を上品と為す。又欧邏巴の中諾尔勿惹亜より出す者にして其の質脆して碎折し易し、これを法児設亜私別私都と謂ふ。法児設は仮なり。亜私別私都は即ち石麻の和蘭言なり。自余諸国、尚を多くこれを出す者有り。本邦出す所の者、亦恐らくは是の類ならん。

「火浣布」翻訳の実際

本章における以上の検討の結果を要約すれば次の四点にまとめられる。ボイス、ウォイト、ラーナウはそれぞれの原書をさす。

一 訳文の五割ほどはボイスの「アミアントス」と「アスベスト」の二項目に依拠している。両項目の抄訳を編集しているが、文法知識がないため、多くの場合、文章の構造に即することができない。とくに「アスベスト」項目では近代ローマの製法をタングート王国の製法と誤解した。

また、しばしば、原文を省略したり、原文から離れ推測による修飾の説明を加えたりする。全体として、当たらず

といえども遠からずという不正確な翻訳といえる。

二 ウォイトの「アミアントス・アスベストス」項目は大部分が利用されている。古代ローマでのアスベスト利用法の一部は原意を把握できず誤訳し、古代ローマの製法が謎であることが理解できない。ここでも原文にない文飾が見られる。薬効の記載部分は原意をほぼ捉えている。

三 訳文の三割ほどは、挿図の第一図から第五図までの解説がしめられている。第三図の典拠は不明であるが、他の四図はラーナウから取られている。これら四図の説明はいずれも原文のごく一部の語句を拾っただけで、原文の意味を把握していない。また、図の説明においても古代ローマの事例であることが理解できない。

ラーナウ原文の図の説明以外の部分も利用しているが、古代ローマの事例とアグリコラの挙げる近代ドイツの事例を時代的に区別できない。

原文の語句を部分的に抄訳したため、同時代欧州の博物奇品室におけるアスベスト布ブームが記載されていることを理解できない。

四 訳文の末尾で、アスベストの産地と産地別の優劣を論じ、さらにノルウェー産の「ハルセアスベスト」（贗アスベスト）の紹介をしている節は典拠不明である。

おわりに

以上三章にわたる考察を要約し、今後の調査研究の方向をさぐってみたい。

伝統的な日本文化においては、「いろは」四十七文字によって物と言葉を分類、列挙し、情報と知識の伝達、教育に役立ててきた。節用集によって代表されるこの「いろは」文字文化は寺子屋教育の普及によって庶民生活に根付き、強固な文化的基盤となった。蘭学の勃興と発展はアルファベット順配列の西洋文字文化と伝統的な「いろは」文字文化の二重構造を生み出し、この二重構造は明治啓蒙期を経て、近代教育が整備されるまで続いた。アルファベット文字文化への転換は一八二〇年代の蘭学塾における原典主義教育に始まるといつてよい。

「いろは」文字文化の文学的表現が和歌であり俳句である。十九世紀中頃の欧州を例を取ると、欧州日本学の開拓者レオン・ド・ロニーはパリで和歌文学を講じ、石版によって日本の文字文化を知らしめた。また、ライデンのもう一人の開拓者ホフマンは日本伝統文化の骨格をなす漢字のテキストを自身の開発した漢字活字で印刷した。半世紀遡って文化年間の日本に例を取ると、幕府の蝦夷地取締御用羽太正養がクナシ

リ島でアイヌ風俗を詠じた「蝦夷地歌仙」、オランダ商館長ドゥーフが京都祇園の二軒茶屋で作った俳句、この二例は我々に一時の安らぎを与える異文化交流史のエピソードである。しかし、羽太とドゥーフはともに、蝦夷支配を強化する幕府がロシア、イギリス、フランスの三国を世界的列強として認識し始めた緊張の時代に生きていた。

十八世紀後半、勃興期の蘭学は医学にとどまらず、博物学的な幅広い好奇心と探究心に支えられていた。火流布（アスベスト）はエレキテルと同じように、欧州においても日本においても、文明の並行現象ともいえるべき博物奇品室の流行のなかで、収集と研究の対象となった。日本では、火流布で香敷（銀葉）を作った平賀源内によって、伝統文化のひとつ香道と蘭学が結び付けられ、火流布ブームが起きた。そのなかで、江戸蘭学の開拓者、前野良沢はオランダ語事典類のアスベスト項目の翻訳に取り組んだ。しかし、一方で、中国由来の本草学的な知的枠組みのなかで、小野蘭山に代表される日本独自の観察科学的な本草博物学が生まれたものの、蘭学勃興期の蘭学者たちは西洋文法知識と十分な語彙力、そして古代と近代の区別という重要な歴史知識を持たなかったため、船載されたオランダ語の博物書、事典類を正確に読み解くことはできなかった。良沢訳「火流布」にみる翻訳の実態は『解体新書』の翻訳にも劣るほどであった。

本稿では、洋学文庫資料の書誌的調査の過程で、異文化交流史という観点から若干の特徴ある資料を選んで考察をすめた。そのため資料の書誌的記載を十分には行っていない。筆者は書誌的調査を進めるにしたがって、本学の洋学文庫が印刷文化史資料の一大コレクションであるという認識を深めつつある。今後、異文化交流史の観点とともに、印刷文化史の観点も取り入れて、さらに調査研究を進めたいと思う。

註

- (1) 図3の『童蒙必見和漢洋伊呂波帖』に見えるハングルは字形の誤りが多い。架蔵『大日本永代節用無尽蔵』の最終四三三丁表には「朝鮮之仮名」としてハングルをイロハ順に漢数字とともに掲げ、「右朝鮮のかなハ反故堆より見出さるまゝ、こゝにしろす又一より十迄の言詞ハ鮮人ものをかぞふる語なり」と解説を添えている。節用集におけるハングル紹介の初出は後考に待ちたい。以下、各図のキャプション末尾の「」内の数字は、本学洋学文庫の整理番号である。本文中で資料名の直後に示した場合もある。
- (2) 松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店、一九九八年、二七七ページ、参照。
- (3) 緒方富雄「坪井信道塾の塾生がつくった2つの医薬品辞典」、『蘭学資料研究会研究報告』第二五三号、一九七一年、および、松田清「坪井信道門人による薬名術語集の成立と展開（上）」、『神田外語大学日本研究所紀要』第9号（本号）、二〇一七年、参照。
- (4) 片桐一男「安懷堂をめぐる二・三の問題」、『日本医学雑誌』第一五卷一号、一九六九年、において初めて、「M・O・ケンゾー」が「三尾謙造」と同定された。
- (5) 松田清・勝盛典子・益満まを「桂川甫周訳并模犀図について」、『研究論叢』第八三号、京都外国語大学、二〇一二年、参照。
- (6) 『微虫図』の成立事情と著者土田英章の伝記については、末中哲夫・北村二朗・遠藤正治『微虫図』と土田英章』『実学史研究Ⅲ』実学資料研究会編、思文閣出版、一九八六年、参照。
- (7) 松田清編『山本読書室資料仮目録』（京都外国語大学国際言語平和研究所、二〇一三、三九九〇—二番）
- (8) 中村不折書『七体いろは』（大正二年）はこの伝統を受け継いだものである。
- (9) <http://static.torontopubliclibrary.ca/da/pdfs/osborne-book-w-005.pdf>
- (10) 古谷尚子「官許独学階梯」と「足羽県活版局」——明

治初期の福井における教育と活版―」、『若越郷土研究』五〇巻二号、二〇〇六年、一四一ページ。

(11) 平仮名は連綿体活字によるらしい。

(12) 日置謙校訂『麦水俳論集』石川県図書館協会、一九三四年、所収「山中夜話」、参照。

(13) 早稲田大学蔵本（文庫08 B0127）http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_b0127/index.htmlによる。

(14) 『四海句雙紙』掲載のドゥーフの俳句については、中村孝志「ゾーフと俳句」、『日蘭学会通信』第三号、一九八四年九月、参照。

(15) 神保博行「香道の成立と展開」『香と香道（第二版）』香道文化研究会編、雄山閣出版、一九九五年、一六四ページ、参照。

(16) 『平賀源内全集』上、二〇〇ページ。原文中の漢文は読み下して引用した。

(17) 『平賀源内全集』上、一九九―二〇〇ページ。

(18) 本書の書誌については、松田清、前掲書、六一―六二二ページ、参照。外科医ヤン・フランソワ・デ・ハウトは明和五年四月五日、真如堂東陽院で茶毘に付された。大島蘭三郎「蘭館医デ・ハウトの死についで」、『日本医史学雑誌』第四六号、一九七〇年、参照。

(19) 『黒田麴蘆関係資料目録』京都大学附属図書館、二〇〇〇年、二五ページ、黒田麴蘆「蔵書目」、参照。

(20) 松田清、前掲書、三一八ページ、参照。

(21) 八百啓介「蘭学における『コンストカビネット』について」『洋学史研究』二六号、二〇〇九年。

(22) 菅野陽「司馬江漢著『おらんだ俗話』」、有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅳ』、一九七七年、九二―九三ページ。

(23) 松田清、前掲書、六九二ページ、参照。

(24) 『前野良沢資料集』第二卷（鳥井裕美子監修、佐藤春代編集）、大分県先哲叢書、二〇〇九年、所収『爸乙悉的里亜加方 紀藩 鳳翔公子 訳』、参照。鳳翔公子と徳川頼徳の蘭学社中における位置付けについては、松田清「甫周書簡・玄白漢詩貼交幅にみる蘭学社中の知的世界」『特別展「医は仁術」公式ガイドブック』TBS出版、二〇一四年、参照。

(25) 松田清、前掲書、二二〇ページにおいて、同じ澹寧斎の号から、本書を誤って大阪の儒者飯岡義斎旧蔵と推定した。

(26) 前野良沢訳「火浣布」の原文については、早稲田大学蔵本（文庫08 C0021）http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_c0021/および、前掲

の『前野良沢資料集』第二卷所収の翻刻を参照した。
(27) 宮下三郎「レメリーの薬物事典の和訳『ドロゲレイ

ン本草』『和蘭医書の研究と書誌』井上書店、一九九七
年、参照。